
City of chaos

ブラック?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C i t y o f c h a o s

【Nコード】

N 7 2 7 1 M

【作者名】

ブラック？

【あらすじ】

20XX年、日本経済は崩壊した。

政府は解散し、日本は完全なる無法地帯となる。

生き抜くために、武器を握る市民…

撃ち抜かれるのは相手が、己か

【序】

日本国神奈川県某所

狭い路地を男が走る。

「ハア…ハア…」

何かに追われているようだ。

腕には小さな鞆。それを大事に抱えながら、男は走る…。

「ハア…ハア…、こ、これさえあればこの国から抜け出せる、抜け出せるんだ…」

男は走りながら呟いた。

路地の向かうに光が見える。あそこまで行けば、追手は諦めるだろう。

パンッ

後ろの方から乾いた音がした。

同時に足に走る激しい痛み。

「ぐ…ぎゃあああ！？足が…」男は足を押さえて倒れた。抱えた鞆は放り出され、地面を滑った。

…ガッ

突如現れた黒い靴が鞆を押さえつけて止めた。

「はい、確保」

やる気の無さそうな男の声。撃たれた男が顔をあげると、若い青年が自分に拳銃を突きつけているのが見えた。

「あゝ、わかる？ あんたもう終わりだよ？」

死んだような目をした青年は、痛がる男に呟いた。

「……かつ、金！金ならいくらでも出す！！命は助け」男が慌てて後ろに逃げようとする、何か硬いものが後頭部に当たった。

「……………」

振り返ると黒光りする銃口 初老の男が銃を構えていた。

「ヒイ！？」

男は逃げ出そうとするが、

「へえ？あんたじゃあいくら金出すんだい？」

最初の青年に髪の毛を掴まれ、無理やり顔を向けさせられた。

「ぜ……全部だ！！有り金全部やる！！」

男はポケットを探り、財布を放った。ずしりと重い音がする。

「…ふん、もらっていくぜ。」青年は髪の毛を離し、財布を拾ってポケットに閉まった。

「ハア…ハア……………え？」

ひとしきりほっとしていた男は肩で息をしていたが、顔をあげると目の前に黒いものが……

「鞆も金も、お前の命も全部もらっていく。じゃあな、おっさん？」

ガキンッ

「ちょ……お前…ッ!!」

ズッダアアアン!!

青年の銃は火を吹いた。

…ザッ

後ろで見ていた初老の男は鞆を拾い上げた。

「…行くぞ……」

「あいよ」

二人はそのまま路地を出て、行方を眩ませた。

後には死体だけが残された

20XX年、積みりに積もった不良財政を抱えた日本政府は全世界に向け非常事態宣言を発した。

先進国の財政破綻

それは世界的にも類を見ない異常事態だった。

国民の信頼を失い、単なる借金団体と化した政府は民衆の暴動で倒

れ、日本は完全なる無法地帯に変化した。

国外に逃亡する富裕層、国内に流入する膨大な銃火器…。

文字通りの“混沌”^{カオス}だ。

もちろん諸外国の干渉はあった。平和維持と名付けられた、侵略軍は世界各地から日本に送り込まれた。

しかし、軍隊は壊滅した。

民衆たちの激しい抵抗………想像を絶する市街戦………あまりの激しさに軍隊は撤退せざるを得なかった。

此処に世界で唯一政府を持たない地域が出来た
国名すら無い、【ニホン】と呼ばれる場所…

世界の警察を自負する某経済大国は更なる軍を派遣しようとしたが、世界の批判を浴び、何も出来なくなった。

対立する諸外国は均衡を保つために【ニホン】を干渉を許さなかったのだ。

誰も【ニホン】に手出しが出来ない

犯罪組織、マフィア、諜報組織、世界の“裏”を支配する連中は【ニホン】に巣くい始めた。

血で血を洗う抗争、巨大化する企業、無限に広がる無秩序なスラム…

此処を支配するのは“正義”じゃない。

圧倒的な金と暴力だけが力だ。

自らの頭と体しか信じてはいけない世界…

民衆は武器を握り、嘘と裏切りで生活する。

それが【ニホン】……………

その中を駆け抜けた強者たちのストーリー！。

絶えない銃声、あたりを覆う硝煙の煙

無慈悲な銃弾が撃ち抜くのは、相手が己か

【巻】 Raven Claw (前書き)

本編始まりますよ (。 。)

楽しく読んでもらえれば嬉しいです (、 、 人)

【壱】 R a v e n C l a w

左胸か、若しくは眉間を

確実に狙って、引き金を引きなさい

そう言って僕に渡された銃は

何も語らず、冷たく光っていた

(D e c l a r e w a r)

慈悲深き正義？

(S t a r t w a r)

(Y e s , S i r . D e c l a r e w a r)

無常？ L o v e & a m p ; P e a c e

(S t a r t w a r)

出典、ポルノグラフィティ「敵はどこだ？」より抜粋。

神奈川県某所

ジリリリリ

……朝らしい。

騒々しい目覚まし時計は、未だに夢から覚めない持ち主を待っていた。

傍らのベッドには、青年が大の字で寝ていた。

寝相が悪いのか、掛けていただろう布団はとうに体に被さってはいなかった。

起きる気配は全く無い。

ジリリリリ、ジジジジジ

起きない主に怒鳴るかの様に、目覚まし時計はアラームの音量を一段階上げた。もはや騒音である。

しかし、起きない。

ジジジジジ、ガガガガガ

ついに、音量は最大になった。凄まじい震動が部屋に響く…

しかし部屋の主はうめき声をあげて、寝返りをしただけ…。もともと掛かっていなかった布団は、更にベッドの隅に押しやられた。

ガガガガガ ガッシャアアン！！

目覚まし時計は自らの震動に耐えきれず、サイドボードから落ちた。
盛大な破損音と飛び散る部品。

しかし時計の最後の叫びは持ち主に伝わった。

……ガバッ

流石に無視できない音は、さわやかな目覚め（？）をもたらした。

「……へ？何で時計が壊れて……」

かなり鈍い感覚の持ち主らしい。
しばらくボーッとしていたが、

「あゝ、くそっこれで何回目だよ。」

やっと状況を理解した様だ。

青年はベッドから降りて目覚まし時計を拾うと、部屋の隅にある「
ミ箱にシュートした。

スポッ、ガッシャアアン！！

見事一発で壊れた時計はゴミ箱に入った。

もちろん、派手な音をたてて、またもや部品が宙を舞う。

「はい、ナイスシュウトお」

（この青年のせいで一体幾つの時計が“ナイスシュウトお”になったのかは、計り知れない）

「……あれえ？」

…夜にカーテンを閉めきっていたはずの部屋は明るくなっていた。
カーテンを透かして日の光が差し込む

「ふうん、今日も晴れか…」そう言っ、青年はカーテンを無理やり開け放った。

ザッ！

思った通りの快晴だ。 部屋から見える景色もいつもと一緒に

倒壊したビル街、錆びついた線路と、傾き停止した電車

“いつもの光景”だ。

一通り外を見渡すと、満足したかの様に、青年は深呼吸し、窓に背を向けた。

そしてサイドボードに置いてあった古びたリモコンを手に取り、テレビを付けた…

ブッ、ザーーーーー…

テレビはつかないようだ。勘にさわる磁気音が流れる。

「……オンボロめ、これでも食らえ！」

青年はベッドの上に放置してあった水入りペットボトルを、テレビに投げつけた。

ザーーー、ガッ、バチッ

ペットボトルはテレビを側面を強打し、テレビは人らしき影を映し始めた。

「はっ、俺って天才だぜ。」（いずれテレビも目覚まし時計と同じ運命をたどるだろう）

影はだんだんと形をなし、女性のニュースキャスターの姿に変わった。

白人のニュースキャスターだ。

「……OK? Next news from mid-east Asia. Many people……」
滑らかな英語が流れる。

「」
青年は鼻歌を歌いながら、冷蔵庫を開け、サンドイッチの朝食を取り出した。ベッドへ歩きながら、サンドイッチを食べる。挟んでるのはチーズだけだ。

「……last night. The president declared that Gagarin was……」
突然、ニュースキャスターの姿が飴細工の様に歪み、雑音が入る。
再びテレビは黒い画面を映し始めた。

「……はあ、またかよ……、しょうがない……おりゃー!」
再び青年はペットボトルを投げつけた。
ペットボトルは激しくスピンし、今度はテレビの上部を強打した。

「k…n…, p…j…w…ガンッ! ザーーーーー」
当たりどころが悪かったようだ。完全に砂嵐状態に突入した。

青年は顔をしかめた。

「…お、落ち着け…落ち着くんだ俺…もう一回叩けば…」

そう言うのとテレビに近付き、側面に平手打ちをかました。

バシン、バシン!

「ザーーーーー」

効果はないようだ。

更に強く叩いた。

「ザーーーーー、…k…p…n…x…te…」

性別不明の奇声が漏れ出した。なんとかかなりそうだ。

(いける!)

今度は拳で殴ってみた。

ガンガン!!

「un…b…ge、ブチッ ザーーーーー」

生き返ろうとしていたテレビは息の根を絶たれた。

「……………、さっさと直りやがれ!! バギッ!」

青年の我慢は尽きた。

罪もないテレビの側面を強烈な拳が襲った。

「ザーーーーー、ブチッ、……………。」

効果はないようだ。

むしろテレビは抹殺された。

「……………」

青年も沈黙している。

「……………」

青年の中で何かが切れた。

「FUCK IT ALL!!がらくため!!」

青年はおもむろにパジャマの懷に手をつ込むと、黒い物体を取り出した。

金属質の輝き、重厚な質感 拳銃だ。

ガキンッ

撃鉄が起こされる。

ズガン!、ガン!、ガン!、ガン!

青年はテレビに向け容赦なく全弾発砲した。

キン キン キン……

もう銃弾は無いようだ。

薬莢が床を弾く…。

銃弾の餌食となったテレビは原型を止めていない…

割れた液晶と内部からは、火花と煙が漏れている。

硝煙の臭いが鼻をつく。

「……………」

青年は落ち着きを取り戻したようだ。

「あゝ！！ またやっちゃった！！」

銃を放り投げ、少年は頭をかきむしった。

…銃は鈍い音を立てて、ベットへ落下した。

「ちくしょう！ 今月は壊さないつもりだったのに！！」
どうやら壊した電化製品は一つや二つではないようだ。

ガン、ガン！

… またも銃声 ではなく、ノックの音が響く。

「おゝい、レイ！ 起きてるか？ いや、銃声したから起きてるね？」
若い女の声だ。声は女性だが、口調は完全に男のそれだ。

「あゝ、鍵なら空いてる。入っていいぜ？」

レイとよばれた青年はドアに呼び掛けた。

「んじゃ開けるね」

ズガンッ！！

ドアが勢いよく開く。入り口に立つ女は、Ｔシャツに短パン…かなり際どい出で立ちだ。脇に銃を吊っている。
その体勢を見るに…蹴り開けたらしい。

「はい、おはよー… ってまた派手にやったねえ…、テレビ。」
女は早速大穴から煙を出すテレビの残骸に気付いた。

ドアを蹴り開けたことに対する反省はないらしい。

「ちくしょう、ほっといてくれ！それよりドアは蹴って開けるもんじゃないって何回言ったらわかるんだ？リン…」

青年は彼女をリンと呼んだ。

「それは聞き飽きたよ。これ買い換えるのにいくらかかるんだろうねえ？クスクス…」

リンは顔にどす黒い笑みを浮かべてニヤニヤした。

かわいい顔が台無しだ…

（それとも黒い方が本性なのだろうか…）

「…はあ…」

レイはベットの端に腰かけると、頭を抱えてため息をついた。

…ふと気づく。

「リン そういやなんで俺のところに来たんだ？」

「あー！」

テレビに開いた大穴を覗き込んでいた彼女は何か思い出したようだ。

「“ボス”があんたを呼んでたんだ、あたしすっかり忘れてた。」

全く悪びれずそう言った。

彼女には反省するという気持ちが欠如しているらしい。

「はあ…“ボス”がか…、行かなきゃまずいな…」

「あたりまえでしょ？蜂の巣になりたくなかったら速く来いってさ。」

あのボスが言うことだ、冗談に聞こえない。

「分かった、着替えてすぐ行くぜ。」

レイは立ち上がると壁にかけてあったシャツをとった。

「了解いゝ、んじゃ外で待ってるね」

そう言つとリンは部屋から出ていく。

…バアンッ

ドアを力任せに閉めていった。

衝撃で何かが床に落ちた。

ドアの蝶番…

「はあ…」

再び修理するものが増えた。

そう悩みながらシャツを羽織る。

身支度が整ったところで部屋を出ていこうとするが、大事なモノを忘れていることに気付いた。

「いけねっ、商売道具忘れた。」

ベットまで戻る。

青年は放置された金属の塊に手を伸ばした。

拳銃……これがなきゃ仕事にならない。

その銃身には銘が彫ってあった。

B e r e t t a M 9 2 F “ R A V E N C L A W ”

青年はそれを驚掴みにすると、シャツの裏側のホルダーにねじ込んだ。

「さあて、行きますか」
さっきの蹴りで歪んだらしいドアを無理やりこじ開け、青年は出ていった。

青年の名は、神崎 零。

レイと呼ばれる彼は
者だ。

O u t l a w … 無 法

【巻】 Raven Claw（後書き）

どうだったでしょうか（´・`）

あ…はい…銃とか大好きです（〃〃）テレツ？

これからガンガン撃たせます？

さて、気になる“ボス”とは……次で出しますゝ（^ ^）／

感想などもよければ書いてください??

【弐】 E n p t y G u n s (前書き)

ちわゝ(ゝ・・)ブラックす
ガンアクション開始すw

【弐】 E n p t y G u n s

僕の銃口は敵を探していた

敵を 敵を 敵を 敵はどこだ？

決めてくれよ 撃つべき敵を

いつそ撃つてくれよ この左胸を

(D e c l a r e w a r)

慈悲深き正義？

(S t a r t w a r)

(Y e s , S i r . D e c l a r e w a r)

無常か？ L o v e & a m p ; P e a c e

(S t a r t w a r)

出典、ポルノグラフィティ「敵はどこだ？」より抜粋。

神奈川県川崎市北部エリア

“旧” 武蔵溝ノ口駅前

ここは数十年前まで川崎北部エリアの中心だったらしい…商業と交通の要衝として。

今は錆びた鉄の塊となって横転している電車が、毎日24時間往復し、多くの人がこの地を通り過ぎた

（今じゃ考えられないね）

雨風に晒され赤く錆びつき、今となっては昔の姿すら思い浮かべられない鉄屑を横目に見ながら、レイは線路に沿って歩いていった。

（Peaceful age “平穏時代”の遺物なんざ興味ねーな！）

ただの鉄の箱に見えてきたそれから視線を離し、レイは自分が向かっている方向の巨大な建造物を直視した。

“旧” 武蔵溝ノ口駅

そう呼ばれているそれも、平穏時代の遺物だった。

川崎の南北エリアの往来と、神奈川と東京を結ぶ交通の要。

平穩時代を生きていた人々の移動の交差点だ。

ここに住んでいればどこへでも行ける　人々は愛着を込めてこの地を「ノクチ」と呼んだ。

“昔”の話だ。

JRとかいう鉄道会社が消滅し、電車は来なくなった今、交通の要としてはこれっぽっちも重要でない。

それでもこの地に人は残った。

使われなくなった駅の施設は人々によって商いの場として復活した。

この暴力と金だけがものを言う時代で唯一、暴力が押さえられ商業の場　闇市だ。

広い空間だったはずのバスターミナルや、その上の駅前広場、複合商業施設はすべて市場……野菜果物から武器銃弾、挙げ句は命さえも売り買いされる闇の市場として生まれ変わった。

「俺あそこあんまり好きじゃないんだよね」

隣を歩いているリンに愚痴をこぼした。

「文句言わないでよ。どっかのバカがテレビに全弾撃ったからでしょ？」

朝の一件で、俺の銃の弾薬のストックはなくなっていた。“仕事”に武器を持たずに単なる役立たずだ。敵に殺される前に“ボス”に

血まみれにされるだろう まっぴらごめんだ。

「はあゝ 仕方がないか……」

俺達はごちゃごちゃとした市場の中に入っただけだ。

“旧”武蔵溝ノ口駅は3のエリアに分かれている。

食料や日用品を売っている比較的 안전한 駅前広場。

次にバスターミナルエリア。

ここでは燃料、資材、車、などの物資を調達できる。

最後に旧ショッピングモールエリア。

かつて大勢の人々が訪れただろう、複合商業施設群には武器、爆薬、弾薬、その他危なそうなものを売っている。もちろん一番危険なエリアだ。銃声が聞こえない日はない。

俺たちの目的は弾薬調達だから、嫌々ながらもその商業施設のエリアに行かなければならない。

（はらへったなあゝ）

思えば朝食はサンドイッチ一切れ…当たり前腹が空く。

「おゝい？ 広場でなんか食い物買っていないかあ？」

リンに呼び掛けると彼女はこつちを振り返った。

鬼の様ににらんでやがる……（汗）

「はあ？ あんた遅刻して血まみれになりたいの「ぐうう」……」
腹の虫がなった。俺のじゃない。目の前にいるリンからだ。

「…あれゝ？ はらへってるのか？」

俺はニヤニヤしながらリンを見た。

「……クソッ 朝食食べる前にボスから電話もらったんだよ」
リンは顔を赤くして言った。女の子として恥ずかしいのは解るが、その前にその口調は女の子のそれじゃない。

「んじゃあ話は早いな。行こうぜ」

俺は言い終わる前に回れ右で市場と走った。

「ちよっ……ちよっと待てよ！」
リンが走りながら着いてきた。

市場はターミナルの上、例えて言えばターミナルの屋根に当たる部分が駅前広場だ。

市場には様々な匂いがした。果物の甘い匂い、屋台から香る焼けた肉の匂い。そして“血”の匂い 忘れてはいけない、ここは金と暴力の支配するところだ。

どんなに活気がある市場に見えようと裏で何をやっているのかは誰も知らない。

（このリンゴうまそーだな…）

俺が今いるのは、八百屋だ……店頭結構な量のリンゴを並べている。しかし店員は見えない。店の奥にいるようだ。

路地の向こうを見ると、何軒か先の屋台でリンがあんまんを買っていた。好物らしい。

買おうか迷っている姿は女の子だが、中身が危ないので可愛いとは

思えない。

俺はリンゴに視線を戻した。

（一つくらいならばれるわけないよな）

レイはリンゴの箱から一番甘そうのを一つ盗ると、店に背を向け

……

ガチャッ

「金を払う気がないならその手に持っているものを戻して、とつと消えてくれ、零？」

なにか頭に固いものが当たっていた。冷たい感触：

頭だけぎこちなく振り返ると目の前に銃口が…

「…あゝ、わかったからそれを下ろしてくれ、司^{つかさ}？」

こいつは八百屋店長……じゃなかった、情報屋の男、埼玉司だ。八百屋は表の顔だと聞いている。

「零、君は何回万引きすれば気が済むのかな？」

「腹の虫が満足するまでさ。」

埼玉はあきれてため息をついた。

「はあ…、とりあえずそれを戻してくれ。」

俺がリンゴを箱に戻そうとすると埼玉は持っていたリボルバー式の

拳銃を下ろす…

（しめたっ…！）

ザッ…ジャキッ！

俺はシャツの内側から愛銃を抜いて埼玉に向けた。

「ハッ！油断したな？司…」

「あんたどこまでバカなのかな？その拳銃、弾切れなんだろう。」

…

…

…バレた？

「朝、テレビに全弾撃ったのは誰だったかな？」

ポロツ…ガチャン

俺は硬直して銃を落とした。

（こいつ何で知ってるんだよ…）

「情報屋をなめてもらっちゃ困るね。よいしょっと…」

埼玉は固まっている俺の手からリングゴをもぎ取ると、しゃがんで俺の愛銃、ベレッタM92Fを拾い上げた。

そして引き金をガチガチ引く…もちろん銃弾は出ない。

「やっぱり弾切れか、バカだねえ」

そう言っただけで埼玉は俺にベレッタを投げ返した。
硬直からとけた俺は、慌ててそれを受けとる。

ついでに何かが飛んできた リンゴだ。

「情報屋一番の御得意様のアなたなら言うてくれれば一つくらいやるよ。これで万引き失敗12回目だな？」

埼玉はあきれたような笑いを浮かべている。

「13回目さ。間違えるなよ」

空中でリンゴをつかむとレイはリンゴをかじった。

「おい、レイ？もう10時だ！早くしねえとボスに殺される！！」
振り返ると片手にあんぱんの袋：結局買ったらしい：をもって手を振っているリンの姿が遠くに見えた。

レイは自分の腕時計を見て焦った。

「やべっ、もうこんな時間か」

「なんかあるのかい？」

埼玉が訪ねる。

「ボスが話がしたいだと。たぶん“仕事”だろ？」

「大変だねえ？」

他人事の様に埼玉は返した。

「まあな。今度は仕事を頼みに来るさ。じゃあな、リンゴサンキョ」

そのままレイは全速力で走っていった。リンゴはいつのまにかなく

なっている…もう食べたのだろうか。

………

零がいなくなつたあと埼玉は考え事をしていた。

ふとポケットにしまっているリボルバーをだした。

ガキン

そのまま撃鉄を起こし、引き金を引く…

……カチン、カチン

リボルバーから情けない音が出る…。

本来情報屋に銃は必要ない 無限の情報こそが武器だからだ。

しかし、この危険な市場ではさすがに武器を持たないのでは死んだも同然だ。

だから埼玉は常に銃弾の入っていない拳銃を持ち歩く。

銃を扱えない埼玉がこないかついリボルバーを持っているのは、単に威嚇だけが目的だ。弾は要らない。

…しかし、神崎 零 あいつが銃を抜いたときのあいつの目は、紛れもなく“殺ル”だった

いつもの死んだような目じゃない

あいつは確かに自分の銃が弾切れだって知ってたはずだ…でも…

（あいつは俺を殺す気だった…）

…ゾクッ

冷や汗が流れる。

（何者だよ…あいつ）

埼玉はあの二人組がかけていった方向を仰いだ。

あるのは複合商業施設…武器弾薬の調達エリアだ。

【弐】 Empty Guns (後書き)

～後書き劇場～

零「なんだよ、この後書き」

リン「作者が後書き作るのめんどいから登場キャラに語らせるらしいよ？」

零「へっ、いい加減な作者だな。」

作者「お二人さん遠慮ない罵倒ツスね（汗）」

零「あつ 作者出てきた（笑）」

リン「www あつ そういえば“ボス”を出すんじゃない？」

作者「あ………忘れた（。。。）」

ジャキン、ガチャッ！

零、リン「この音は“ボス”……………逃げろっ！」

ズダダダダダダダ！！

ギャアアアア…

次話に続くw

【参】 Black Hold Uppers

右を見れど 人は俯き

左を見れども 人は沈み

去りゆく日々は 君に問う

それでいいのかかと君は問う

やがてまた訪れる 冷たい銀色の世界

ほら 自分見失っていく

君がこの世に生まれてきたことは偶然じゃなくて

無くてはならない人なのです

僕がこの世に生まれてきたことも偶然じゃないと

ここに居ていいと信じたいのです

嗚呼 さ迷えどひた走る

必然の道標 探して

出典、road of major「偶然という名の必然」より抜粋。

「で 何が御必要ですか？」

丁寧だが腹黒い感じの声。そいつは黒のスーツを着込み、肘掛け椅子に座っていた。

…レイはこいつがあまり好きではなかった。

こいつの名前は、中田 悠次 武器商人だ。

今俺たちがいるのは、旧武蔵溝ノ口駅第三エリア、複合商業施設跡だ。

この物騒な場所に居を構える“エクストラ・オーダー社”の長がこの中田である。

ちなみにエクストラ・オーダー社の本社は外国らしく、中田は支店長という立場。

「あ、あゝ必要なのはベレッタM92Fの弾、数量はいつも通りで

」

俺は緊張しながら答えた。

（こいつには簡単に気を許しちゃダメだ…）

「了解致しました。ああ、御購入費はちゃんとお持ちですかね？現金以外は御断りですが。」

中田の目が黒く光る。お分かりの通りこいつは金にうるさい。

俺は財布を取り出して中身を見た。

…札が数枚…、ギリギリ足りる。

（これ払ったら飯食えないな）

一瞬躊躇したが、撃てない銃を持っていたかもしれない。銃弾を
買うことにした。

「ちゃんとあるぜ、中田さん。」

「それは結構。金さえあれば銃弾だろうが、機関銃だろうが、戦車
だって御売りしますよ。」

若干引きながら、俺は中田に金を押し付けた。

ガッ！ バシッ！

目にもとまらぬ速さで受け取った金を封筒に入れ、引き出しに締ま
った。確実に拳銃を抜くより速いだろう。「確かにお受け取りしま
した。」

中田は金をしまつと、背後の扉を開けようとしたが、偶然気がつい
たように言った。

「私は御注文の品を取りに行きますが、商品庫を見ていきませんか
？ つい先日新しく入荷したんですよ。」

新しいおもちゃを買ってもらった子供の様な明るい笑いを浮かべて
いる中田。

「ふん、少し見ていくかあ。」

レイは中田に続いて商品庫の中に入っていった。

「ちょ……、中田さんこれどうやって国内に入れたんだよ!？」

商品の中には、ありとあらゆる拳銃、機関銃、グレネート、手榴弾、果てには対戦車ライフルまでが無造作に置かれていた。

「私には本社以外にもちよつとしたコネがありましてねえ……」

そう言いながら中田は“DANGER”と書かれた弾薬の箱をこそこそやっている。

(“ちよつとした”って この対戦車ライフルとか米軍のじゃねえか……こっちは中国語とか書いてあるし)

レイはそう考えながら、やたらと漢字が書かれた箱から一丁の拳銃を取り出した。

「それに興味が御有りで? 御購入になりますか?」弾薬箱からレイの注文した銃弾を取り出した中田が、レイを見て言った。

こいつの目には商売の事しかないのだろうか……

「い、いや見てただけですよ」

俺はあわてて、拳銃を箱に戻した。このまま持っていれば、無理矢理買わされるかもしれない……

「金さえあれば何でも売りますよ、何でも。大事なことですから二度言いました。」

銃弾の詰まった弾倉をレイに渡しながら、中田は黒い笑みを浮かべる。

渡された弾倉はすぐに装填しておいた。

「奥の部屋にもっとオススメが有りますが、見ますか?」

「あゝ、この後仕事なんでまた今度で」

ここにいたら何を買わされるかたまったものではない。適当に理由をいって去るべきだ。

「そうですが…ではまたのご利用を。」
中田は残念そうな顔で言った。

「んじゃあ、またよろしく頼みますよ」
レイは足早に中田の店から出ていった。

「遅かったね、なんかあったの？」
複合商業施設エリアを出たあたりでリンは待っていた。
(あんまんなは既になくなっていた)

「いや、中田さんにいろいろ商品とかなんとか見せられてね」
レイはうわの空で答えた。

「あの人はいつも商売熱心だからね。」
そう言っリンは顔をしかめる。この街であいつな好意を持つてる奴はそうそういない。ただ、武器商人としては一流だ。

「…んで、ボスは何時に集合だと言ってたん？」

「時間？それなら11時さ。……………今の時間は……………」
そこまで言っリンは自分の腕時計を見る。

…みるみるリンの顔が青くなつた。
レイは自分の時計に目を落とした。
既に針は11時を過ぎ、15分な なるうとしている。

「や、ヤバい…ヤバいぞ、レイ！！ もう11時を過ぎてるっ！」
言うやいなや、リンは駆け出した。

「うわゝ、まじかよ…、急ぐとしますかゝ」
レイも後を追う。

「だいたい、あんたのせいだよっ！？ 市場よらないで行けば間に合
ったじゃん！」

リンは走りながら悪態をついた。

「まあねゝ でもリンだってあんまん買ってたよねゝ」

「バツ、バカ野郎。あたしはいいいんだよっ！」

2人はビル街の奥へと走っていった。

溝ノ口エリア
とあるビル。

ブラインドを下ろした室内は薄暗い。部屋の中では2人の人間がソ
ファーに座りながら、煙草を燻らせていた…

「あいつら遅いわねー。どこで道草食ってんのかしら？」
淑女的な女性の声があった。声とは裏腹に内容が粗野だ。

「……いつものことだ。必ず来る。遅れてな…」

静かな初老の男性の声が受けた。年季が入った声だ。

「フフ……お寝坊さんのガキどもには説教をやらないとね…」

チャキ、ガキンツ！

重々しい金属音が薄暗い室内に響いた。

駅前から続く大通り。

二つの影が走り抜けていく

「あともうちよつと…、レイ！今は何時！？」

先を行くリンは後に続く青年、レイに振り返りざま叫んだ。

「えゝ、今ちようど11時30分だぜゝ」

走りながら教える。のんきな声だ。

「マジかよ！！確実にボス怒ってるぞ」

女性らしからぬ台詞を吐いて、リンは速度を上げた。

ほどなく、目的地のある雑居ビルに、2人は到着した。目指すは二階だ。

走るスピードそのままに2人は階段をかけあがる。

「ハア…ハア…やつとついた。」

肩で息をしながらリンは呟く。

目の前には頑丈な鉄の扉があった。表札を掛けるべきはずのところには、黒地に“B H U”と白字で印刷されたシールが貼ってあった。

「この扉の向こうにボスがいるのかゝ、会いたくねえな」
レイが無責任にぼやいた。

「今日の遅刻はあんたのせいだから、扉はあんたが開けてよ。」
リンが怖い顔でレイをにらんだ。正論なので反論できない。

「はあ、分かりましたよ。開けりゃあいいんだろ。」
そう言つてドアノブに手をかける。

「案外ボスも遅刻してるかもな」
リンに振り返り、お気楽な顔で、ドアノブを回しドアを開けた。

「30分くらい遅れたって大目に……」
レイは顔を戻して部屋の中を見た。

ガキンッ！

「……伏せる……!!」
レイはリンの後頭部を押さえて、床に伏せた。

ズダダダダダダダ……!!

熱い熱風が二人の頭上を一瞬遅れて、吹き抜ける。

放たれた無数の弾丸は開け放たれたドアの向かうの壁に、無惨な傷を紡ぐ。

「つてえー!! なっなんだよこれ!？」
無理やりレイがリンを床に伏せさせたので、彼女は額を床にぶつけたらしい。

「……頭を……頭をあげるな……!」
鉄の暴風は二人の15cmほど上をなぎ払っている。当たればただ

ではすまない。

ズダダダッ！ キン、キン、キンッ…

「…あら、ずいぶん遅いのねえ？お二人さん？」

部屋の扉の向かうで、女性が仁王立ちになっている。キリッとした顔立ちに、笑みを浮かべているが、放たれる感情にはどす黒い怒りが込められていた。

手にはなんと、MINIMI 軽機関銃が握られていた。

（おいおい、あんなんで撃たれちゃガチで肉片しか残らないぜ）
地面に伏せたまま、レイは白い顔で固まった。

「どこをうつついてたんだか知らないけど、時間は守りましょうねえ？」

機関銃を構えながら彼女は二人に近づき、しゃがんだ。

「さて、どうしたものかしら？」

彼女の目が二人を見下ろす。淑女的な表情で微笑んでいたが、目が冷たい。

「あゝ、ボス？ すまない弾薬の補給に行ってたのさ。そしたら中田の野郎が…」

ガキンッ！

レイの額に硬くて冷たい突起物…つまるところ機関銃の銃口が当てられていた。

…レイの顔に冷や汗が流れる。

「言い訳は無用。」

彼女の顔にはさつきまでの淑女の趣が消えていた。そこにあるのは無表情な殺戮機械だ。

「…お…遅れてすみませんでした…。」
レイは正直に謝った。

まだ死にたくはさらさら無い。
冷や汗があごを伝って床に落ちた。

ジャキッ

「分かればよろしい。さつさと仕事始めるわよ。」
既に表情は淑女的なものに戻っている。
二人はほっとため息をついた。

そう、彼女こそが神崎 零とリンの“ボス” 山中^{さとみ}智美だ。モデルかと思うほどの長身をスーツに包んだ姿、漆黒の長髪に口紅を塗った唇、鋭い眼。どこからどう見ても大手企業の女性重役にしか見えない。

しかし彼女の本質は戦闘狂だ。外国の外人部隊に居たらしく元軍人なのだ。

ちなみに歳は聞かない方が言い。M2重機関銃で肉塊になりたくなければ。

「…さつさと仕事の話をしてくれ…」
初老の男の声がした。

「ああー、来てたのかい？村仲のおっさん。」
床から起き上がったレイは、部屋の中央にあるソファに座る男に気がついた。

「…一時間くらい待ったぞ…」

村仲とよばれた男の前にある灰皿には、待った時間の長さを表すように煙草の吸い殻の山が出来ていた。

彼の名前は村仲 理儀。優秀なドライバーだ。口数の少ない、地味な服装をした初老の男だが、腕は確かである。

「あゝ、すまねえな、おっさん。」

レイはさすがに謝った。彼はここの一番の年長者だ。

「…かまわない。お前が自分の仕事をやってくれればな…」
新たに煙草に火をつけながら、彼は興味がなさそうに言った。

「それで今日の仕事ってなんなのさ、ボス？」
リンはソファに座りながら、山中に聞いた。

「ああ、まだ言ってなかったわね。」
山中は今気づいたように言う。

「今回の仕事はある企業から。川崎南部から北部へ行く輸送車から、あるものを強奪してほしいっていう内容よ。」

「あるもの？」

レイが拳銃の手入れをしながら聞く。

「情報よ。大量のメモリースティック。平穩時代のものらしいわ。」

（平穩時代のものか。どうせ今は残らない先端技術のものってか）
銃身の掃除をしながらそう考えた。

「…中身がなんだろうと関係ない。奪って依頼人に届ければ良いだけの話だ。」

村仲が言う。

彼は先ほどの煙草を吸い終わり、次の煙草を箱から出そうとしていた。

箱の中に煙草が一本も入っていないのが分かると、明らかに顔をしかめた。

「そういうこと。あんたたち二人が遅れている間にこっちの準備は出来てるわ。そっちの準備ができ次第、行動開始よ。」

そう山中は言いながら、ソファアの向かい側にあるデスクの引き出しを開き、煙草の箱を取り出すと、村仲に放ってやった。

「…恩にきる…」

初老の男は嬉しそうに受け取った。すぐさま封を開けて煙草を吸い始める。

「俺はいつでも準備オーケーだぜ、ボス？」

「たいして準備する事は無いわね。」

レイとリンはそれぞれ自分の銃を確かめた。それだけでOKだ。

「そう言うと思ったわ。さあ、こんな仕事さつさと終わらせるわよ。」

「…了解っ！」「」

男女4人は席をたち、ドアから各自出ていった。

…俺たちの仕事？

俺たちは“奪い屋”

職務内容は人からものを奪うこと。

チーム名は“BHU”

B l a c k H o l d U p p e r s

黒き篡奪者だ

【四】 S n a t c h a w a y f r o m t h e m !

色めきたつ ネオンサイン

汚れた街 行き交う人波

君は明日に 何を見る

君の明日は輝いているか？

TVニュースが繰り返し

僕に投げつける世界

もう 当たり前のことかの様に

僕がこの世に命授かりしは偶然なのですか？

僕がこの世に命授かりしは必然なのですか？

君がこの世に命授かりしは偶然なのですか？

君がこの世に命授かりしは ……

出展、road of major「偶然という名の必然」より抜粋。

神奈川県北部川崎地区

“旧”尻手黒川幹線道路。

時は正午。

頭上に上がった太陽は、地上のあらゆるものを照らしていた。

真つ昼間の広い道路の路端にカーキ色の四輪駆動車ハマーが駐車している。

巨大な車体は二車線の道路に乗り出していたが、道路の交通量は極めて少ない。

他の車が幾度か、通り過ぎただけだ。

かつては川崎を縦断し、“工業都市川崎”の基盤となった大型幹線道路、尻手黒川線はほぼ廃線状態だ。

二十数年前、日本経済が崩壊すると同時に、近代輸送形態の要の石油は、ほぼ国内に入ってこなくなった。燃料が枯渇した国内では、自動車における活動は出来ないのだ。

かろうじて車を動かせる者達、すなわち闇ルートでの入手、巨大企業で独自に海外に、輸入のパイプを持つ団体。あるいは彼らから燃料を奪取したものだけが車という移動手段を使用できる。

現に、ハマーの窓から見えた通過車両は、いかにも輸送会社のものらしいジャンボトレーラーと、チンピラのおんぼろ乗用車が数台だけだ。

ハマーの前後の歩道には、乗り捨てられたのだろっ、あらゆる種類の車両が放置されていた。ほとんどが錆びにまみれているか、解体されて部品の山となっているものばかり。

自動車の墓場だ。

放置車両の隙間にハマーは、目立つ巨大な車体をなんとか隠していた。

「…標的の情報は？」

ハマーを操る初老の男、村仲はタバコに火をつけながら助手席の女性に尋ねた。

「東柴コーポレーションの輸送トラックよ。依頼人の情報なら午後一時前後に、ここを通過するはずなの。レイ、リン、見逃さないでね？」

依頼内容の書類らしいものを読みながら、助手席の女性 山中は後ろの席に座る2人に呼びかけた。

「あいよ、ボス。標的に護衛とかついてるのかねえ？」

双眼鏡で遙か遠くの路上を見ていたレイは、尋ねた。

「そこまでは依頼人からは知らされて無いわ。でも相手は一流企業よ。護衛つきは間違いないわね。」

「あゝ、面倒臭っ！」双眼鏡から目を離して、あくびをしながらレイは文句をいう。

「大企業からの情報奪取か…依頼人も大企業なのか？」

窓を開けてレイと反対方向を眺めていたリンは、山中に振り返った。

「さあね、匿名での依頼だからそんなの解らないわ。」興味なさげに言い放つ山中。

「絶対大企業だ。まったく、企業同士の対立なんかにあたしらを巻き込まないでほしいよ。」

リンは窓から乗り出したまま、腕組みして呟いた。

…平穏時代が終わりを告げ政府という名の枷が外れた日本では、企業は合体融合を繰り返し巨大な社会組織と化した。

今となつては昔話に語られる“WW2 (World War 2)”

”以前の財閥の様な、血縁企業ではない。

法の束縛から解放され、規制もなくなくなった日本国内で、企業はそれ自体が異常増殖し“小国家”とも言える異様な支配体制を作り上げた。

国家のさまをなす企業同士の対立は、むしろ国家間の対立に等しい。

強いものが生き残る

世界の国家から数多の動植物までも当てはめられるこの法則が絶対だ。

所詮この世のことわりとは金と暴力、それらによる支配に過ぎない。

「…必要の無いことには頭を突っ込むな…これが俺達の掟だ…忘れたか、リン？…」暇そうにタバコをくわえながらハンドルに手をかける村仲が呟く。

「ん…わかってるよ、村仲のおっちゃん。」神妙な顔でリンは遠くを見つめていた。

…視界の遙か向こうで何かが揺らいだ。

一直線に続く道路の地平線に動くものが見える。
だんだんと大きくなる…近づいているのだ。
次の瞬間、その動くものの正体がわかった。

「……………！ 車だ！ しかも複数来るッ！」
たしかに見えた。でもリンの肉眼ではこの距離で細かいところまでは分からない。

唯一双眼鏡を持つもの…レイを見ると、彼はまだ車を探していた。

「リン、どこに見えるんだあ？ わかんねえ。」
レイは双眼鏡をあちらこちらに振り回していた。

「南部川崎方面だよ。早く詳細教えな、レイ？」

「ピントがぼやけて…」
ぼやぼやしている間に点のような車の姿は豆粒くらいになった。

「ああ！ もう！ 貸しな？ レイ！！」
レイの手から双眼鏡をもぎ取ると、再び車らしきものを見てみた。

トラック1台に護衛車3台 中々のスピードでこっちに向かって来る。

既に双眼鏡なしでも車種が判ったが、リンの持つ双眼鏡はトラックの荷台のコンテナに、“東柴”のロゴがあるのを捉えた。

「“東柴”のロゴ！間違いない、標的だ！！」
双眼鏡にかじりつきながらリンが叫ぶ。

「あらあら、護衛に3台なんて足りると思ってるのかしら。」

見張りをリンとレイの二人に任せていた山中は、近づいてくる一団を一瞥すると、呆れたようにいった。

ドウルルルン…ガゴツ

「…数など関係ない…質だ…」

アクセルをふかし、ギアを入れ換えながら村仲が呟く。吸っていたタバコを窓から投げ捨てる。

「やっと来たか、暇だったなあ」

懷から、拳銃ベレッタM92Fを取りだし、レイは不敵に笑った。

護衛車両で挟んだトラック達は今では近くに迫り、ついにレイ達の乗るハマーの隣を、北川崎方面に走り抜けていった。

「なかなか速いわね…さあ、“野郎共”…狩りの時間よ？」

ドウルルル…ブオンツ！

「…しっかりつかまれ…」

しつかり暖められたエンジンが咆哮を上げる。

ブウンツ　ズガアアン！

轟音とともに前方にあった廃車を吹き飛ばし、ハマーは弾丸の様に発進した。

「…ふん…カーチエイスなんて久しぶりだな…」

巨大なハマーを操る村仲はニヤリと笑った。

「嬉しそうね。連中相当慌ててるみたいよ？」

山中はそう言いながら目の前に置いてある無線機を指差した。

「…ガガ…不明車両…追跡されている…ザザ…振り切れ…救援…ハマー…ガガ…」

途切れ途切れの会話が雑音に混じって聞こえていた。この特別製の無線は傍受機能付きだ。相手の会話が筒抜けである。

「ふ〜ん、良い仕事するじゃん、アイツ。」

お気楽な声はレイ。

「これで引きこもりでなきゃ完璧なのにねえ〜」

ここにはいない仲間の悪口を言いながら、レイは窓を開けた。凄まじい風が車内に吹き込む。

「…そう言っな…ヤツにはヤツなりの仕事がある…」

「そうかねえ〜」

風の音にかき消されそうな呟きをレイは言った。

「え〜と、トラックの前に護衛1台、後ろに護衛2台かあ。てか、

あっちもハマーあるじゃん。」

吹き抜ける風に目を細めながら、ひととき大きな車体に気が付いた。

「…望むところだ…」

村仲はさらに速度を上げる。

「…ガガ…銃器…許可…ザザ…用意…」

無線がいつそううるさくなる。

「物騒なやつらだ、銃用意してるよ？」 双眼鏡を手にリンが叫ぶ。
最後尾のバンの窓を通して、銃の影が見えるのを彼女は見落とさなかった。

ガチャッ、タタタッ！

バンの後部が開いたと思うとチカチカと銃火が瞬く。乾いた銃声が響いた。

「気が早いよね。撃ってくるなら撃ち返すまでよ。」

山中はそう言いながら、車内の天井のサンルーフを開ける。

ガチャ

ハマーの天井の部分にはなんとM2重機関銃が装備されていた。

「淑女に乱暴な事をする男どもにはお仕置きしなきゃね？」

満面の笑みを浮かべながら彼女は引き金を引いた。

ズガガガガガッ！ダダダダッ！

護衛車のアサルトライフルとは比べようもない大きな銃声が轟く。

遥かに太い火線が最後尾のバンを貫いた。

車体が鉛細工のように引きちぎられ、12・7mm弾が雨あられのごとく叩き込まれた。

ダダダダッ　ズツガアアッ！！

突如被弾したバンはガソリンに引火したのか大爆発を起こし、吹き飛んだ。

「…フフ…殲滅よ。」

明々と燃える炎に照らされた山中の顔は満足げだった。

「いいぞ　やつちまえ、ボス！」

リンが意気揚々と叫ぶ。爆発したバンは反対車線までぶっ飛んで火災を起こしていた。ガソリンの燃える匂いが鼻に届く。

（…うわぁ、おつかねえ…まさに蜂の巣じゃねえか。）

美しくも残忍な微笑みを浮かべるボスの顔を見上げながら、レイは絶対に山中を二度と怒らせないと誓った。命がいくつあっても足りない。

最後尾の車両がやられたのに焦ったのか、他の護衛車からも複数の銃火が瞬いた。

タタタタッ！バババババ！

チュンッ、チュンッ！

いくつかの銃弾がHAMMERのボンネットを襲うが、軽い音と共に火花

を散らして、弾かれた。

「ギャハハハ、そんな豆鉄砲がハマーに効くわけないじゃん！」
下品な声で爆笑しながら、リンが怒鳴る。

無論嘘ではない。ハマーはアメリカ軍の傑作装甲車の民間転用型だ。
大した事ではびくともしない。

「一両脱落か！あと2両！」双眼鏡で残りの護衛車を見ていたリン
はとんでもないことに気付く。

バンが消えたことで、その前を走っていたトラックの荷台が見える
ようになった。荷台では何人かの男が大きなものをいじくっている。

それは自動車を葬るのにはいささか過剰な装備だ。

「……ッ！？ TOW！！」

瞬発的にリンは叫んでいた。

兵器史上最強の陸戦兵器、戦車を破壊するために開発された武器
TOW対戦車ミサイルがハマーに向けて発射されようとしていたの
だ。

いくらハマーの装甲が厚かろうが、あれの前には大した効果はない
だろう。

「なんですって!？」

山中は笑っていた顔を硬直させた。すぐさま重機関銃をミサイル発
射装置に向ける。

引き金を引こうとしたところで、気が付いてしまった。

(… 残弾、0…!?)

景気よくぶっ放し過ぎたらしい。補充の弾倉は後部座席に置いてあるが、山中が陣取るサンルーフからは手が届かない。

バシユッ！

勢いよく何か空を切る。

弾切れの事実気づいたのと、TOWが発射されたのは皮肉にも同時だった。

至近距離で発射された殺人者は、瞬時にハマーに迫る。その距離20 m。

(…やられる！)

山中は死を覚悟して目をつぶった。

…それは一瞬だった。

何者かが山中の足を掴んで、車内に引きずり込む。

代わりにものすごい勢いで誰かがサンルーフに身を乗り出すのがわかった。

「消える。」

バアッ！

冷たい眩きと大きな銃声。感情の欠片もないその声は、たしかにレイのものだった。

ガンッ

ズツドオオオオン！！

放たれた拳銃弾は、15mにまで接近したミサイルの先端を貫く。

猛然とミサイルは大爆発し、辺りを火炎が乱舞した。

すかさず山中はレイの足を掴んで乱暴に引きずり下ろす。

間一髪、爆炎がハマー全体を覆った。

開けたままのサンルーフから熱風が車内に吹き込む。

「せっかく助けてやったのに乱暴だなあ、ボス？」

座席に叩きつけられたレイは顔をしかめて文句を言った。

「バカを言うんじゃないわよ。こうでもしなきゃあなた今ごろ顔面火傷よ？」

呆れながらも山中は内心ほつとしていた。

流石のハマーも対戦車ミサイルの直撃を受けたらスクラップは避け得ない。

何より車外に出ていた山中は消し飛んでいただろう。

（それにしても…）

あの一瞬の事を考えて背中に一筋の汗が流れた。

（至近の距離で放たれたミサイルを拳銃で撃ち落とすなんて…人の技じゃないわね）

神技とも言えるその銃の腕前を称えながらも、その背中に悪寒も感じていた。

（あの一瞬に聞こえた声…レイなのかしら？でも…）

山中の代わりに助手席に陣取り、傍受無線をへらへら笑いながら聞

いている青年とはとても思えなかった。

「…やっと煙を抜けるぞ。…」

村仲が無表情でいう。この男だけがTOWを見ても何も動じなかった。

ブワァ！

真っ黒い煙のカーテンからハマーは飛び出す。

巨大な車体が陽の下に躍り出た。

今のミサイルで追跡者を排除したと思ったのだろうか、油断していた護衛車たちは度肝を抜かれる。

「…ザザ…なぜ無事？…拳銃…TOW…ガ…撃ち落とした…馬鹿な…ガガ…」

俄然、無線が騒がしくなる。

無理もない。戦車をも粉碎するミサイルの直撃を確信していたのだ。

「…ガガ…小銃弾でミサイルをおとしただど！？そんな馬鹿な！…ザ…」

護衛のリーダーらしい声がひととき大きく聞こえた。

「それが俺には出来るんだよね…」

体を伸ばしながらレイが間延びした声で呟く。

「うわぁ、またあいつらTOWかよ…」

トラックの荷台をうろちよろする人影をリンの双眼鏡はとらえた。

「今度はしくらないわよ？」

山中は12.7mm弾の弾倉をこっそり持ってルーフに上がろうとした。

「ちょっと待てよ、ボス？」

リンは振り返って山中を引き留めた。
その顔には黒い笑いが…。

「あんな奴等には目には目を、つてな？」

リンは後部座席にある細長い包みを指差した。

「あら、そんな良いものあったのね。」

それを見た山中はかなり満足げだ。

（女つてのは怖いぜ）

包みの中身を知っているレイは渋い顔をしてリンがルーフに上がるのを見上げた。

…護衛トラック荷台。

一人の男が、TOW発射の準備をしていた。

「あとは標準だけか…」

男がスコープを覗き込むとさっきと同じように女がハマーの屋根に陣取っていた。

「ふん、M2を撃とうつたってその前に火だるまだぜ。」

男は嘲ったがあることに気づく。

（…？違う女か？）

さっきまでルーフに陣取っていた女は美人だったが、若いとは言えないヤツだった。

しかし今スコープにうつるその女はどうみても十代。おまけに大胆な服を着ている。

（ヤバい…タイプだ）
鼻の下を伸ばしていたが、その女が何かを担いでいることに男は気づく。

… 冷たい旋律が背中を走る。

バシユツ

「……………アツ、RPG!!？」
手遅れだった。若い女が担いでいた筒から白い煙が吹き出る。

男の叫びに反応した他の者が振り返ったときには、もう放たれたRPG 対戦車ミサイルは荷台に飛び込んでいた。

ズッガアーーン！

積みまれていたTOWミサイルに引火し、荷台にいた男たちは肉片と化する。

皮肉にも火だるまになったのは護衛車だった。

「二台目、爆殺！」

大声で叫びながらリンは歓声をあげる。
被弾したトラックはよろよろ走りながら中央分離帯に激突し、派手に燃え始めた。

「…ガガ…応答せよ…応答せよ…くそっ…ザザ…」
傍受無線からはリーダーらしき声が虚しく響いている。

「ついに最後の一両か！」

ルーフから降りながらリンは最後に残った大型車、ハマーを睨み付ける。

東柴社のトラックとレイ達の乗ったハマーとの距離は30mあるかないか。そのトラックにぴたりくつつくように護衛側のハマーが寄り添っていた。

「ハマーとなると少しきついわね。」

山中はさもめんどくさそうに言う。

「またRPG使うのか、ボス？」リンはこの武骨な対戦車ミサイルが使いたくてたまらないらしい。確かにスツキリ爽快な破壊方法だがいささか過激すぎる。

「そう思つのは山々だけど、敵サンはさせてくれないみたいよ？」山中はそう言つて座席にしっかりつかまる。

「どういう意味」「対ショック体勢!!」

普段は静かに話す村仲が珍しく叫んだ。

ブーーン、ズガアンッ！

接近するエンジン音、鉄と鉄がぶつかる音と共に、凄まじい衝撃がハマーを襲った。

「…ちっ…」

村仲が華麗なハンドルさばきで車体を安定させる。

「…ってえ！なんだってんだ!!」

おでこを押さえながら泣きそうな顔でリンが悲鳴を上げた。

見ると明らかに腫れている。衝撃で何処かしらにぶついたらしい。

「親分さんのお出ましくてか、乱暴だぜえ」

とつさに身近に有った取っ手を掴んで難を逃れたレイは車の右側の見て驚きあきれた。

「体当たりなんてありかよ」

レイたちのハマーのすぐ隣にさっきまでトラックにくっついていたはずの護衛ハマーが並走していた。

村仲が運転するハマーとは車色や細部は大分異なるが、確かに巨大なハマー。

そいつが近づいてくる。

明らかに衝突進路だ。

「おっさん、避ける！」

リンが叫ぶ。

無理な話だ。いくら太い幹線道路を走っているとはいえ、元々巨大なハマーが二台並走しているのだから逃れる余地がない。

ズギヤッ！ バギバキッ…

再び鋼鉄の怪物同士が衝突する。BHU側のハマーは大いに揺れ、歩道側に押し出された。

ハマーの巨体がガードレールをひん曲げ、街路樹をなぎはらう。

「…ゲホッ…、こりやないぜ」

激しい揺れに翻弄されながらもレイは拳銃を抜く。

「喰らいやがれ！」

カンッ カンッ

なんとも情けない音をたてて拳銃弾はいとも軽く弾かれた。

「さすが世界に誇るハマーね。傷すらついてないわ」
皮肉ったように山中は言った。

「冗談じゃねえ！RPGを「無理よ。」
騒ぎ始めたリンをいさめるように山中が制した。

「この揺れでルーフが上がったら落下決定。二台のハマーの下でミンチ決定ね。ハンバーグが作れるわ。」
恐ろしいことを平気で言う山中。ミンチになるのは事実だが、みんなが大好きハンバーグで例えないで欲しい。

「じゃあどうしろってんだ、ボス!？」
今度は頭を抱えて暴れ始めた。

「少しは落ち着きなさいな。銃は銃、車は車の専門家に任せるのが一番。」

そう言って村仲に視線を送る。
ミラーでそれを見た村仲はほんの少し口角をつり上げた。

「…任せる…格の違いを見せてやる…」

ブーーン…

再び相手のハマーが近づく。

今度ぶつけられたら完全に歩道に乗り上げてしまっただろう。このス

ピードで突っ込めば大惨事だ。

「ハハッ、同じハマー同士だ。先手必勝だな！」

至近距離に迫った護衛ハマーの運転手が怒鳴る。声からして無線で聞いたリーダーだ。

「……………」

村仲は無言だ。

「ハマー同士で負けるのは悔しいだろうなあ！」

最後のセリフだと言わんばかりに張り上げると、リーダーの男は更にぶつける体勢に入った。

「…あんたは一つ誤解をしているぞ…」

やっと村仲は口を開く。

「なにっ？」

「…この車はただのハマーじゃないんだ…」

めいっばいにアクセルを踏む。

ギューン…

「…こいつはM1109ハンヴィー…」

十分に加速したところでもむろにハンドルを切る。

「…重装甲型ハマー…アメリカ軍装甲車そのものだ。…」

巨大なM1109の車体が護衛ハマーに迫った…

メキヤッ…

ガンでもドカンでもなかった。

何かが引き裂かれる音。

インパクトの時に咄嗟に目をつぶったリンを待っていたのは、想像しえない光景だった。

「ハマーが…」

まるで空き缶か何かのように護衛ハマーの外郭がめくれ上がっていた。

リンたちが乗っているBHU側のハマー、正確にはM1109ハンヴィーの装甲の角がもうひとつのハマーに深く食い込み、それを哀れな姿変えていた。

「…ふん…小僧が…」

村仲はさも興味がなさそうに、相手側の運転席にいるリーダーを見た。

彼は、すぐ背後で起きた惨劇に開いた口が塞がらなくなっている。

「…終わりにするぞ…」

そのままハンドルをゆっくり切った。

ぐちゃぐちゃになったハマーは中央分離帯に近づく。

何をしようとしているのか感づいたリーダーらしき男は、我にかえると脇目も降らず、スクラップと化したハマーから飛び降りる。

高速で移動するハマーから落下した彼はしばらく転がって動かなくなった。

彼が飛び降りた瞬間、激しい火花が飛び散る。

ギヤギヤギヤーーー！メキツバキツ！！

背筋が凍るような音をたてて鉄の怪物が潰れた。

村仲が操るM1109がハマーを中央分離帯に押し付けたのだ。

「…ふん…他愛もない…」

ハンドルを戻しながら無表情で呟く。片手でタバコを取り出すと、火をつけた。

「えげつないわね。ぺしゃんこよ?」

「…実力差だ…」

村仲は更にアクセルを踏み、本来の目標 東柴ロゴのトラックの横につけた。

「やつと標的ね…、面倒臭いっただらありやしない。村仲、レイよろしくね?」

山中は腕を組んで呼び掛けた。

「了解。」「」

煙草をくわえながら再び村仲はハンドルを握る。

中央分離帯に押し付けるようにハマーをトラックに近づけた。

「さっさと終わらせるかあ」

愛用のベレッタのリロードをすると、ハマーの窓を開ける。

すぐ近くにトラックの運転席が迫っていた。

ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガンッ!

ほとんどゼロ距離で発射された9mm弾はトラックの側面窓ガラスを叩く。

防弾ガラスだったが、さすがにの距離では防ぐことは出来ない。窓ガラスは碎け散った。

「トラックの運転手！今すぐトラックを止めなあ？」
大穴と化した窓から運転手に向かって叫ぶ。

「ふざけるな！消えろ！」

運転席から銃弾が飛来する。ハマーの車体をかすった。

「どうする、ボス？」

ベレッタを握りながらレイは振り返る。

「“排除”するだけよ」

「…あいよ。おっさん！」

レイと呼ばれた村仲はハンドルを切る。

装甲車をも潰す鉄の怪物がトラックを中央分離帯に押し付けた。
激しい摩擦音を響かせ、火花が散る。

レイはハマーの窓から手をだし、トラックの中に向けた。

突き出された漆黒のベレッタM92Fが鈍く光った。

それを見て明らかに運転手は動揺した。

「黒いベレッタ…！お前まさか…？」

その言葉がトラック運転手の最期となる。

「じゃあな。」

バアンッ！

トラックの窓ガラスが赤く染まる。
拳銃弾は運転手の頭を穿った。

「いっちょ上がり。」

ベレッタを懷にしまいながらレイはため息をつく。

「…お疲れさん、村仲！車を止めて。」

「…了解した…」

山中に言われるまでもなく、更にトラックを押し付ける。
オレンジの火花が噴水のように上がり、トラックとハマーは停車した。

「さてと…村仲は依頼主に報告ね、後は下車して東柴社トラックを確保！」

奪い屋、B H Uのメンバーはそれぞれ車を降りた……………。

生き残るために奪う。足りなければ奪い合えばいい

それが俺達の街のルールだ。

奪われた者は消える。それもこの街のルールなのだ。

荒廃し続けるこの街で

俺達は今日も奪い続ける…

【四】 S n a t c h a w a y f r o m t h e m ! (後書き)

〽後書き劇場〽

レイ「やっと一仕事おわったなあ」

リン「実はまだメインキャラが出てねえんだよ。馬鹿作者め」

レイ「えっ、誰が出てないの？」

リン「傍受無線作ったアイツだよ！」

レイ「ああ、引きこもりかあ！」

??「おっ、俺ハ断ジテ引キコモリジャナイゾ!？」

レイ「出やがったなあ、ニート野郎！」

リン「えー、ニート野郎については次回出演…by作者…らしいぜ」

レイ「こんなひきこもりが気になる方は次もよろしく」

??「オイッ、勝手ニオワルナ…ぶちっ

後書き劇場終了

ゝ登場人物紹介ゝ（前書き）

今さらですがキャラ紹介追加しましたwww

小説を書く上での基本設定みたいなもので、本文に書いてないことも載ってます（´・`）悪しからず

いずれは挿し絵をつけたいと思います

～登場人物紹介～

> i 1 0 9 3 9 — 1 3 1 3 <

神崎 零 “Gunman”

奪い屋“Black Hold Uppers”（BHU）の雇われ銃使いの少年。

黒髪黒眼の典型的日本人。

かなりの面倒臭がり屋で、容姿もハネた髪の毛、乱れた服装とテキトーさが目立つ。

しかも時間にルーズだという完全なダメ人間orz

しかしガンマンとしては優秀で、BHUが事務所を構える旧溝ノ口エリアでは、その銃さばきとテキトーさを知らないものはいない。

いわくつきの愛銃

“ベレッタM92Fカスタム RAVEN CLAW”

を握り、BHUの主要メンバーを成す。

平穏時代の終焉の混乱で孤児となる暗い過去を持つが様々な事情により、奪い屋のボス、山中に拾われ今に至る。

R I N “ S o l d i e r ”

ストリートチルドレン出身の暴力女子。

奪い屋 B H U の戦闘員。

茶色がかった髪をポニーテール風に束ね、露出度の高い大胆な服を着こなす。

大人しくしていれば誰でも可愛いと言われる容姿なのだが、その粗野な言動と男勝りの活発さが全てぶち壊している。

本人は気にしていないのでなお悪い。

性格は言うまでもないがスッキリ爽快簡潔なことを好む。

好物はあんまん。旧武蔵溝ノ口駅の闇市では、毎回と言っていいほどこれを買っている。食べる速さは30秒/個。

さすがは元ストリートチルドレンとあって何でも扱えるオールラウンダーだが、特に体術には自信がある。

実はレイと違い、時間通りに行動する。ボス山中に蜂の巣にされかけたことがあり、それ以来トラウマになった。

物心ついたときには既にストリートチルドレンだったので、自らの出自を知らない。

唯一首にかけてあったアクセサリーに中国語が刻んであったことから、その文字から取って自らをリンと命名した。

13歳にしてストリートチルドレンの大將になったことはリンの武勇伝の一つに過ぎない。

山中 智美^{さちみ}
“ B O S S ”

文字通り奪い屋“ B H U を束ねる最凶のボス。

長い長髪を背中であげ、スラリとしたスーツを完璧に着こなす美人
……に見える（笑）

普段は淑女的口調で話すが、中身はかなり黒い。その恐怖で B H U
内の馬鹿二人（レイ、リン）を支配している。その怖さを“見た目
はレディー、中身は悪魔”と称したレイは、その次の瞬間血まみれ
になるという経験を持つ。

普段から威圧感を振りまいているので分かりにくいだが本気で怒ると
恐ろしく冷酷になり、問答無用で鉄槌を下す。

元軍人。

某外国人部隊に所属し、女性士官として血で血を洗う紛争をアフリ
カでしてきた。現地でもその優秀さは並ぶものはなく、若くして小
佐まで登り詰めた。

自衛官の夫がいたが、平穏時代の終焉により自衛隊が消滅し、行方
不明の後に死亡とされる。

祖国日本の一大事を知り軍を抜けて帰国するが、待っていたのは夫
の死だった。…つまり未亡人。

ボスという指揮官的な立場ながら戦闘もこなす。
武器としては機関銃がお気に入り。本人は火力こそが最重要だと信

じる。鍛えぬかれた（？）その腕は、軽機関銃なら片手で撃てるほど。

年齢をかなり気にしており、彼女の前でそんな話をしようものなら12.7mm弾が飛んでくることだろう。

趣味が裁縫という相反した部分もあるw

村仲 理儀 “Driver”

奪い屋“BHU”のベテランドライバー。

白髪混じりの短髪のおっさん。

無表情かつほとんど無口。自ら発言はあまりしないが、圧倒的な威厳をもつハートボイルドな紳士。

かなり地味な背広を着込み、そこらのおっさんと大差ないように見えるが、驚異のドライブテクを備えている。

BHUの古参で山中とは平穩時代からの付き合いがある。平穩時代にはトラックドライバーだったらしい。

愛車はアメリカ軍御用達装甲車ハンヴィー。

ハンヴィーを民間用に販売しているのが高級車「ハマー」だが、村仲が運転しているのはれっきとした軍用車。

ただし軍用車だと目立つので、ハマーに見えるような偽装を施している。

ちなみにハンヴィーには様々な種類があるが、村仲のは「M110

9」という重装甲型。コンクリートの壁も突進だけでなぎ倒す鉄の怪物www

重度のヘビースモーカー。

毎日かなりの量を吸っているようだ。BHUの事務所には村仲用にタバコの備蓄がある。

タバコの銘柄はマイルドセブン。

タバコがなくなると……

趣味はラジコン。

模型自動車や模型飛行機を手足のように動かす。

中田 悠次 “Weapon dealer”

“旧”武蔵溝ノ口駅商業複合施設“NOCTY”に居を構える「エクストラ・オーダー社」支店長の武器商人。

黒いスーツがバッチリ似合う若いお兄さんだが、金への執着心と腹黒さはハンパない。

本人いわく、

「金さえあれば何でも売りますよ？何でもね。」

口調は常に丁寧で、営業スマイルを振り撒く。

しかし中田の本性を知るものにとっては恐ろしいの一言に尽きる。

国際的なコネを異常なほど持っており、彼の店には世界各国の兵器が並ぶ。

無法の街、溝ノ口を牛耳る者の一人でもある。

埜山 司 “ I n f o r m e r ”

“ 旧 ” 武蔵溝ノ口駅闇市場で情報屋を営む青年。
表の顔として八百屋を営んでいるしっかり者。

優れた情報家として裏家業の者たちの間に知られている。

Tシャツにジーンズと何ら一般人と変わらないをしているが、
情報収集能力は抜群でインターネットはもちろんその噂話までも情報源とする。

調査屋も兼ねており全く情報がない場合でも、徹底的に調べて情報とする。

普通の青年の印象からは考えられないが、身体能力はスパイ顔負け。
体術も心得ている。

子供の頃、両親が暴漢に銃殺され、それ以来銃が苦手に。 “ 情報屋
に銃は要らない ” とごまかしている。

実は、覚えることが苦手。とにかく情報になりそうなことはメモ w

ゝ登場人物紹介ゝ（後書き）

どうでしたでしょうか？

自分は受験生なんで更新遅れるかもしれませんが

少しずつでも更新していくんで、読んで頂ければ幸いです（、、（

感想は24時間募集中です

ではまた次回？

【五】

I t w i l l b e r a i n n i n g , b u t :

& l t .

どもブラックす（、、）

今回からB H Uのお仕事（？）が始まります（、・・）

一話が長いんで小分けにして投稿します

ではどづいぞ／＼（＾）（＾）／

【五】 It will be raining, but : <it>

何回転んだっていいさ 擦りむいた傷を ちゃんと見るんだ

真紅の血が輝いて「君は生きてる」と教えてる

固いアスファルトの上に 雫になって落ちて 今まで どこをどう
やって 歩いてきたかを教えてる

何回迷ったっていいさ 血の跡を辿り 戻ればいいさ

目標なんて 無くていいさ 気付けば 後から付いてくる
可能性という名の道が 幾つも伸びてるせいで
散々 迷いながら どこへでも行けるんだ

大事なモンは 幾つもあった
なんか 随分 減っちゃったけど

ひとつだけ ひとつだけ その腕で ギュッと抱えて離すな
血が叫び教えてる「君が生きてる」という言葉だけは……

……… 出典、BUMP OF CHICKEN「ダイヤモンド」
より抜粋。

雨が降っている…

灰色の空、群青色の海。

殺風景な港には一隻だけ古びた貨物船がある。

小さな少年は男に手を連れられ、その船に乗った。

船に挙げられた赤と青の国旗を見上げて、その男の子は問う…

「どこに行くの？おじさん。」

「海の方だよ。」

男はそう言って顔をうつむけた…

雨が降っている…

暗い海から船がやって来る

廃港に入港したその貨物船は、一人の少年を降ろして再び去っていった。

「日本、か…」 呟く声が吹き抜ける海風と小雨の中へ散る。

灰色の空、群青色の海がどこまでも広がっていた……………

「……おい………おい、レイ……」

誰かの声が聞こえる…

俺を呼んでいるのか？

…俺の名前はレイじゃない。その名はとっくに捨てた。
俺の名は

「……… レイ、起きろってんだ！」

突然腹部に衝撃が走る。

夢の世界にたたずんでいた俺 神崎 零は無理矢理現実世界に引き戻された。

「っ！ ぐはあっ!？」

夢の光景は歪んで一瞬で消え、見慣れた女の子の顔がおぼろげに目に浮かぶ。

が、次に目に映ったのは高速で打ち下ろされる拳だった。

メキヤッ！

「爽やかな朝にしては、ちと荒々しくないすかね、リンさんよお？」
打ち下ろされた鉄拳はベッドを強打した。

間一髪、レイは頭をずらし回避したが音からしてスプリングがイカれたことは間違いない。

目をこすりながら、呆れた顔を暴力少女に向ける。

「あれ…避けたのか？結構本気でやったのに」
案外痛かったのか、手をヒラヒラさせながら陽気な表情で言いやが

る。

(…あれを被弾してたら人生最悪の目覚めだ)
レイは自分の反射神経に感謝した。あの威力は鼻血程度では済まないだろう。

「…ふわあ…今何時だよあ？どうせまだ7時…」
大きなあくびを噛み殺しながら俺はリンに聞いてみた。

「ふん、自分で確かめるんだな。」
にやにや笑いながらリンは近くにおいてあった目覚まし時計を放つてよこす。
ちなみに時計は壊した日の夜に買い換えた。またいつ壊すかわからないが…

「よつと…」
器用に、飛んできた時計を掴むとのぞきこむ。

長針と短針のなす角は60°だ。
つまり…

「ちょ……………10時かよ！？今日仕事か！？」
一気に覚醒したレイは壁にかかったカレンダーに急いで目を向ける。

June(6月)と書かれた月のページ、今日の日にちの欄には何も書かれていない。今日はオフの日だ。

「なんだよ、オフじゃん今日…」
焦って損したようなボケ顔でレイは振り返った。

「バツカ野郎、この前の仕事の結果忘れたのかよ!」
リンは身を乗り出して怒鳴った。

「報酬金を支払わない、ですって!？」

山中がらしくない声を上げる。

東柴輸送隊を殲滅させた、山中率いるBHUは意気揚々と依頼人の元へ向かった。

もちろんトラックに大量に積まれたメモリーカードやらCD-ROMなどの記憶媒体をかつぱらって。

レイにはあまり詳しくないが、相当な情報が詰め込まれているのは分かる。

何しろトラック一台分、CD-ROMだけでもざっと500枚。

そいつを依頼人たちの前に差し出して確認をとらせている最中にそれは起こった。

「私たちが求めるものはこれではない。よって私たちが金を払う義務はない。」

いかにもビジネスマンといった代表らしき男が、CD-ROMの一枚を指しながら言い放つ。

どうやら狙っていた情報と違うらしい。しかしその高圧的な物言いは俺たちを見下していた。

「ふざけるなよ、オッサン!言われたものを持ってきたんだ、払うもん払え!」

顔を真っ赤にしてリンが食って掛かる。見下されているのはともかく、契約違反をされるのはたまらない。

「知らないな。契約内容と違うものなのだからこれはそちらのミスだ。」

居丈高に言うそいつにリンはブチ切れそうになったが、村仲に止められた。

「…それがそっちの言い分なら…しょうがない。しかし我々が奪取したトラックと記憶媒体は返してもらっぞ?…」

タバコをくわえながら椅子に座っていた村仲が反論する。これは正論のはずだ。しかし、次に帰ってきたのは驚愕の言葉だった。

「それについてはわが社が引き取らせていただく。あなた方がこの契約に失敗した違約金としてな?」

グシャ

村仲は燻らせていたタバコを潰した。こめかみに青筋が浮き出ている。それでも掴みかからないのはこの人が紳士だからだ。

にやにや笑いながらそのビジネスマン野郎は脚を組んだ。後ろに座るそいつの部下たちもくすくす笑っていた。

（ コイツ、俺たちをバカにしてるのか!?! ）
露骨に顔をしかめながらレイは懷に手を伸ばす。
隣のリンも爆発寸前だ。

しかし火蓋を切ったのはその三人の誰でもなかった。

ブチイッ！

何かがキレル音がした。

三人の後ろからだ。

後ろにいるのは…

今まさに得物を引き抜かんとしていたレイとリンは硬直した。この音は何度も聞いたことがある。

リンなど真っ赤だった顔が信号機並みに青くなっていた。

俺たちは忘れていた。

BHUで最も危険な人物を。

俺たちはゆっくり、ゆっくり振り返った。

（（あ……悪魔……））

俺たちのボス、山中は満面の笑みを浮かべていた。それはもうにっこりと。

しかし俺たちは知っている。

その目が全く笑ってないことを。

「…あら、そういう考えをなさるのね？」

静かに、しかし何かとげを含んだ言葉が発せられる。

「もちろん、わが社の利益が第一です。」

ビジネス野郎は何を勘違いしているのかさらに煽った。コイツには目の前で起きていることに気づいてないのか…

「…そう。残念、ふふっ…とっても残念よ？」
くすくす笑う山中。

「……………」

やっとビジネス野郎は異変に気づいたらしい。でももう遅かった。

ジャキッ！

「喧嘩を売るところを間違えたみたいね……」「生きて帰れると思うな」

口調が変わった山中の手には愛用MINIMI軽機関銃が、いつのまにか握られていた。

「なっ、何を…」

ダダダダダッ！

血溜まりに薬莢が転がった…

「あゝ、思い出したあ。てか思い出さなくなっただぜ。」

あのあとはかなり酷かった。依頼人たちを挽き肉にした山中の機嫌は最悪。

リンもかんしゃくを引き起こしていたので、村仲とレイの男二人で女性衆を引きずって帰ったのだ。

トラックに満載した情報の山も仕方なく持ち帰った。レイやリンに

とつてはごみの山に等しいが、これをどうにか金に変えないと、仕事の報酬は0だ。

つまりB H Uに雇われているレイにとっては給金0を意味する。

「CDとかメモリとかなんやらは俺の能力外だからな。帰ってねちまったけど、あのガラクタどうなったんさ？」

ベットから起き上がり、レイは冷蔵庫を漁る。

しかし空っぽに近い冷蔵庫からは干からびたサンドイッチしか見つからなかった。

（まずい…まずいぜ…餓死する…）

財布の中には小銭が数枚、とても生活出来ない。

レイはこの性格なので貯金など全くしてなかった。

簡単に言えば、給金がなければこの一週間でレイは、サンドイッチ同様干物と化すだろう。

そんなジ・エンド真っ平ごめんだ。

「残念だけどあたしもあの小難しいのは苦手なんだ。ボスと村仲のおっさんが深夜までずっと調べてた。よく知らないけど確かに“平穏時代”関係じゃないらしいな。」

考えるだけでも頭が痛いと言わんばかりに頭を押さえながらリンは言った。

レイはてきとー過ぎて情報系に適していないと自覚しているのだがリンはというと…

（つまるところ頭がわりいんだよな）

これが確実な理由だろう。

ブンッ、バキッ！

「レイ、お前今すげえ失礼なこと思ったろ？」

リンのすらりとした脚が飛んできた。

ひょいと避けたレイだったが、リンの正確な回し蹴りは最後の食料かぴかぴサンドイッチを窓の外へ蹴り飛ばした。

「ちょ……おまつ……最後の食料だぞ！」

いつから待機していたのか大きなカラスがトンビのごとく、空中に飛び出たサンドイッチを引っ付かんで飛び去った。

「最後のくいものお……」

「フンツ、いい気味だ」

呆然とするレイを尻目にリンは気が清々したこのようだった。

「はあ……で、ボスはどうしたんだって？ あとヘビースモーカーのオッサンは？」

無論村仲の事だ。1日3箱吸うのだからかなりの重症。あんな大量のタバコを買う金はどこから出るのか。

実直な性格のあの人の事だから、山ほど貯金があるに違いないと割り切った。

「オッサンはハマーの整備。ボスはその邪魔なガラクタ共を詳しく調べに……ヤツのところへ行った。朝からね。」

リンは腕を組んでベットの端に腰掛けた。

「ヤツ………ねえ……」

BHUの情報系担当、声しか聞いたことのないあいつを思い浮かべる。

「よし、ヤツのとこへいこうか。俺の未来がかかってるんだ。」
真面目なのかバカなのかわからない理由だが、動かないことにはし

ようがない。

「じゃあ事務所で待ってる。二度寝しないでちゃんと来いよ？」
いつまでもパジャマの青年にリンは釘を刺すと、リンは部屋を出ていった。

「何で二度寝するってわかるんだよ？」

この男は絶対寝るつもりだったに違いない。
またあくびをしながら、ハンガーに掛けた愛用シャツを手を取る。

（　　）　しかしまたあの夢を見るとはねえ…（

無駄に眠い理由はわかっていた。

夜更かししていたからではない。

リンに殺人まがいの方法で起こされたからでもない。

…あの夢だ。

あの夢を見るときは決まって寝た気がしない。

（…とつくに忘れたつもりだったんだけどね…）

こすつても消えないラクガキの様に、頭に染み付いて消えない夢。

頭を掻きながら、レイは忘れようと努めた。

…決して忘れられない過去なのに。

【五】 It will be raining, but : < t .

お待たせしました（・・・）ブラックです

ちょっと忙しくて更新が遅れていました（泣）

今回はアクションなしですが読んで貰えれば幸いです（・・・）

あと、登場人物のところに挿し絵を実験的に配置（＾＾）／

他の絵も書いていくんでよろしくです！

ではどうぞ

【五】 It will be raining, but : <it .

一体どれくらいの間 助けを呼ぶ声を 無視してんだ

その背中に張り付いた 泣き声の主を 探すんだ

前ばかり見てるから なかなか気付かないんだ

置いて行かないでくれって 泣いて すぎる様な SOS

聴いた事ある 懐かしい声 なんか随分 大切な声

ひとつずつ ひとつずつ 何かを落つこととしてここまで来た

ひとつずつ 拾うタメ 道を引き返すのは 間違いじゃない

出典、BUMP OF CHICKEN「ダイヤモンド」より抜粋。

溝ノ口エリア駅前地区

ある雑居ビルにB H Uのボス、山中智美は居た。

「ねえ、まだなのかしら？もう一時間経つわ。」
イライラしたように呼び掛ける。

しかしその相手の姿は見えない。
代わりに部屋の奥の鉄製ドアから何かが聞こえた。

「…待ッテクレ、セキュリティが堅インダ…デモモウ少シ…」

聞こえてきたのは、人の声を真似た合成音だった。性別の区別さえつかない異質な機械音…何度聞いても嫌な音だと山中は思っている。

「セキュリティねえ…そんなに厳重に何を隠しているのかしら…」
自慢ではないが、山中は自分でも結構情報処理ができると自負していた。

そうでなければとても一会社の責任者はつとまらない。

その山中が全く歯が立たなかったのが今回の戦利品、大量の記憶媒体だ。セキュリティが厳しく、パスワードと暗号化がいくつもかけられている。

今の時代、情報は金に等しく価値があるものだが中身を知らないのでは、価値もつけられないし、誰に売っていいのかもわからない。ただここまでの厳しいガードが施されているなら必ず価値ある情報だと山中は考えていた。

徹夜同然に解析が続けたが、全く進歩がない。

そこで山中はプロに任せることにした。
自分の会社の一員であるはずなのに素顔すら知らないこの天才ハッカーに。

腕だけは信用できるが、人としては信頼できない。

今はそういう時代だ。気安く心を許せる時代ではないのだ。

「“K”、早くしてちょうだい」

「ソウ急カスナ、後1分30秒で解析ハ終了スル」

“K”と呼ばれた姿無き声はイラついた感じに聞こえた。

「じゃあ後少しね、中身が気になるわ…」

そう言つて山中は暇そうに視線を泳がせた。

この部屋には装飾品と言うものが全くない。

薄暗い室内には中央に簡素なテーブルとパイプ椅子が置いてあるだけだ。

他には何もない。驚くことに塵やごみもひとつも落ちていない。なんていうのか、人が住んでいるような空間ではないのだ。

部屋でただ目立つのは、入ってきた反対正面にある重厚な鋼鉄製のドアが取り付けられていて、山中がいる方からは開きそうになかった。

“K”の声や途切れることのないキーボードを叩く音がその向こうから聞こえてくる。

山中はその向こうに入ったことはなかった。

、ピーー、ピーー、ピーー…

ありきたりな電子音が殺風景な部屋に響く。

「パスワード解除、暗号解析完了…ボス、全テ終了シタヨ」
再び人工的な声が言った。

「礼を言うわ、“K”…。私じゃ手がつけられないもの。」
昨日の夜の解析のせいで彼女の目は真っ赤に充血し、隈がはつきりと出来ていた。

恐らく彼女の形相は相当壮烈なものだろう。
レイが山中に合っていたら腰を抜かしたに違いない。

「世辞八要ラナイヨ、ボス？」

「謙遜するのは良くないわ、こんなこと出来るのは私の知ってる限りあなただけよ。」

「確カニコレヲ解析出来ルノハアマリ居ナイ……………デモ、コノ情報……………町ノ連中ニ知ラセタ方ガイイ……………」

「……………なんですって？」

「見レバワカル」

鋼鉄製のドアの向こうで、何か音がした。

ドアの下の方からだ。

ちよつとした小窓が付いており、ガコツという開閉音と共に開いた。
小窓の向こうには底知れない闇が佇んでいた。

山中はふとなかを見てみたい気持ちにかられたが、その小窓から例

のCD-ROMが出て来たので、そつちに興味は戻った。

ガラガラ…という音と共にケースに入ったそれがいくつも出てきて落ちる。

最後に分析結果らしい紙の束がひらりと出てきて、そのCD-ROMの山の上を舞う。

ガチャン！

小窓が閉められたのはそれと同時だった。

紙の束を引っ掴んで、山中は貪るように読んだ。

「こ、これって……………」

「カネニナル情報ナンカジャナイ、コレハ危険ダ」

「…冗談にできる話じゃないわ、連絡よ」

彼女は紙の束を粗末なテーブルに叩きつけ、携帯電話を取り出した。

「…“会議”を開く必要があるわね…」

彼女の知っている人々に片っ端から電話していった。

テーブルの上に乱暴に置かれた書類には、ひとつの国旗が見える…

赤と青のストライプ（縞）…青地に浮かぶ数多の白星…

【United States】だ…

「…で、これはどういう状況なのかな？」
事務所に着いたレイは途方に暮れていた。
事務所の中は、想像を絶する光景だった。

目の前に広がるのは、書類、本、CDケースの山…

一面に色々なものが散乱している。まるで下手な泥棒が入ったみたいだ。

「…山中のヤツだ…」
書類の山だと思っていたものがモゾモゾ動く。よく見れば煙が出ている。火事…出はない。鼻をつく臭いはタバコのそれだ。

「うおおっ！？村仲のオッサンか？」
誰も居ない空間に問いかけただけで答えは期待してなかったので、レイはいささかビックリした。

「…ああ、車のメンテを終えてソファで昼寝していたらこのざまだ。まったく…」

村仲がゆっくりと起き上がると無数の書類がバサバサと落ちてゆく。

「何があつたのさ？」

レイは村仲とテーブルを挟んで向かいのソファに座った。テーブルの上も書類に占領されており、邪魔なことこの上ない。
書類を一つ取って見てみたが、難解な数式の羅列が続く意味の無いものだった。

「…この前の件の膨大な情報を…」

「あゝ、そこら辺はリンから聞してる。」
レイは話を遮った。

「…そうか…なら話が早い。山中が分析をしていたんだがな、コンピュータウイルスが紛れ込んでたらしくて情報機器が全部イカれたと山中が嘆いていた。その後であれだ…」

村仲が一旦話を切って部屋の向こうを指差す。
その先には印刷機が置いてあった。

「…あれにウイルスが移ったらしい。勝手に大量印刷し洪水みたいに吐き出してこうなったのだ…」

言い切ると村仲は疲れたかのようにため息を吐き出す。この人がこんな長くしゃべるのは珍しい。それだけ酷い光景だったのだろう。

「で、ボスは？」

「…言わなくても解るだろう？我慢の限界でぶちきれた。そのまま“K”のところに行った…」

「あゝ、そりゃ怒り狂うわな…」

「…ヤツは元から狂っているようなものだな…」

タバコをふかしながら村仲はニヤツと笑った。

この人とボスの関係は、レイのそれより長い。

昔何が起こったのか知らないが、良いことではなさそうだ。

「…ってえ あれ、リンは？ここで待ってる、て言ってたんだけど」

「…そういえばまだ帰ってない。一緒じゃないのか？…」

村仲が吸いかけのタバコを片手に質問したときだった。

バツアアン！

「すまねえ、レイ！ あんまん買ってたら遅くなっ……………ってなんだよ！この部屋！？」

小脇にあんまんの袋を抱えたリンが、蹴り開けただろっドアの向こうで棒立ちになっていた。

部屋を見た感想がレイと同じなのは、偶然の成せる技に違いない。

「よぉー、こっちこっち」

レイが入り口にいるリンに呼び掛ける。

声が聞こえてはじめてレイ達に気づいたようだ。

「レイとオッサンいたのか！ どういうことだよ、これ？」

リンはテーブルまでズカズカと散乱した紙の束を容赦なく踏みつけながら近づいて来た。

テーブルの上にドサツという音をたてて、あんまんの袋が降ろされる。

（いったいいくつ食う気だよ…）

明らかに一つ二つではないことは確かだ。

リンはレイの隣に腰をかけた。

「…？　なんか文句あるか？」

レイの視線に気付いたのか、リンが眉をつり上げて睨んだ。すでにあんまんの一つを手を取っている。

「…い、いやぁー、太りますぜ、リンお嬢さん？」

ちやかして笑う。

当然のごとく剛腕（あんまんを持っていない方）が飛んできたので辛うじて避けた。

「ふん、余計なお世話さ。」

しかめ面のリンが言う。すでにあんまんがその手から消えているのは幻覚か…？

「で、どうなのさ？」

リンは先ほどの質問を繰り返した。

「…朝、記憶媒体の分析…」 「あゝ！めんどくせえ！」

レイが村仲の説明を遮る。あの説明は長ったらし過ぎる。リンなら一言で理解するだろう。

「要するに……………ボスだ。」

「ああなるほどね」

レイの一言簡潔な説明で事足りた。

「でえー、リン？なんでここに俺を連れてきたのさ？」

「あつーと…ゴクツ…そうだった！仕事さ 緊急のな。」

頬張っていたあんまんなを無理矢理飲み込むと、機嫌よくリンは言った。

既にあんまんの袋はしばみかけている。

「緊急のねえ…、依頼人は誰だよ？ボスを通さなくていいのかあ？」
のきな調子で聞く。本来依頼人との接触はボス、山中がしている。
山中が居ないのにどうやって仕事をとったのか…。

「ああ、それはな…」

「…俺の依頼だ。悪いか…？」

「村仲のオッサンの依頼！？どういうことだよ？」

村仲が二本目のタバコをスパスパしながら答えたので、レイは面食らった。

「…ガソリンだ。今日のメンテでも確認したがもう貯蓄が終わる…補給しなければ車とドライバーなしで仕事することになるぞ…」無表情で村仲が言うのでかえって緊迫感がある。確かに車が動かなければ、彼はお役ごめんだ。

「マジかよ…ガソリンがないのかあ…」

「…正確には前の仕事の収入で補給するつもりだったが、ただ仕事同然だったからな…」

吸い終わったタバコを捻り潰し、村仲は唸った。

「…現物奪取だ。タンクローリーを奪う。…」

「そりゃ大胆で物騒な…」

レイはあきれたように腕くみしてソファの背もたれに背中を預けた。

「まっ、もう埼玉の野郎からガソリン関係の情報は買ったのさ。」

リンはあんまんの最後の一つを口に放り入れて飲み込むと、くしゃくしゃに折り目がついた一枚の紙を取り出した。

そいつをレイの目の前でひらひらと振る。

会社らしい高層ビルと小型のタンクローリーが多数駐車している写真が載っている。

ビルの側面とタンクローリーには会社のロゴなのだろう“NEG”と描かれていた。

「巨大企業“NEG”。そこに燃料集積所があるんのさ」
写真を指差し、リンは言う。

「…そいつを奪う。そのままな…」

「ふうん、情報は確かなのかあ？」

「…アイツの情報は信頼できるからな…」

溝ノ口の情報屋、埼玉は情報の信頼度の高さで有名だ。情報は正確さが命なのである。

「外見は小型だがあたしたちの会社で使うには有り余る量だ。奪って損はないよ」

「なるほどお…やってみますかあ！」

レイは承諾した。こんなにおいしい話はそうそうない。事は急げだ。

「よし、そうと決まれば早速行くぜ！オッサン、車出せるか？」
ソファから腰をあげてリンが言う。

「…行きだけだ。ガソリンが足りんからな。帰りはタンクローリーに乗って帰る。…」

そこまで貯蓄が少ないのかとレイは驚いた。
それならこの仕事は失敗できない。

「…とにかく失敗すれば帰りは歩きだ…」

「りようかいっ！行くぜ」

リンが我先にと事務所を飛び出していった

続いて村仲がハマーのキーを持って出ていく。

最後にレイが事務所を後にした。

レイは頭上を見上げる。

薄暗い雲が広がり雨が降りだしそうだ

（なんだか天気わりいなあ……灰色か……気のせいだな）

「おいっ、レイ！ 早くしろよ！！」
車庫の方でリンが叫んでいる。

「ああ……今行く！」

レイは灰色の空から目を背け、ハマーに乗り込んだ

：

： “あの日”もこんな空だと思い出しながら。

【五】

I t w i l l b e r a i n n i n g , b u t

:

& l t .

お久しぶりです（・・・）ブラックす

ちよつと日常生活が忙しすぎてなかなか執筆できませんでした（<—>。）

徹夜とか熱中症とか盗難とか色々あつてw w w

とりあえずどつぞ／＼（＾　＾）／

【五】 It will be raining, but : < .

やっと会えた

君は誰だい？

ああ そつえば

君は僕だ

大嫌いな

弱い僕を

ずっと前に

ここで置きざりにしたんだ

何回転んだっていいさ 何回迷ったっていいさ

大事なモンは 幾つも無いさ 後にも先にも

ひとつだけ ひとつだけ

その腕で ギュッと 抱えて離すな

世の中に ひとつだけ かけがえのない 生きてる自分

弱い部分 強い部分 その実 両方が かけがえのない自分

誰よりも 何よりも それをまず ギュッと強く 抱きしめてくれ

上手に唄えなくていいさ いつか旅に出るその時は

迷わずこの唄を リュックに詰めて行ってくれ

出典、B U M P O F C H I C K E N「ダイヤモンド」より抜粋。

……空は灰色。微かに差し込む陽の光。

次々に流れる群青色の景色。開け放たれた車窓から吹き込む風は、
湿り気を帯びる。

車内で揺られる少年は抗えぬ眠りについてた……

少年は夢を見た。遠い過去のある光景　己の奥深くに眠る記憶だ。

……灰色の空、群青色の街。

黒い銃を手に、少年は人気のない道を歩く。

……頭に叩き込まれた命令　“破壊”、“殺害”、“殲滅”

命令は絶対だ。命令だけが僕の生きる道。僕は命令という名の鎖で操られる人形なのだ
マリオネット

僕はコードネーム“0（ゼロ）”

籠の鳥だ……黒くて不吉な惨めな鳥。

冷たく感情の無い目をした少年は歩き続けた。ただ命令を遂行するためだけに……。

「……い、……おい、……」

レイは自分が揺さぶられているを感じた。明るくて高いが頭に響く。

「……レイ……起きろ……」

レイ？俺の名前はレイじゃないって言っただろ？俺の名前は“ゼ
……

「さっさと起きろ！！テキトー野郎！！」

ガッ！

突然俺は脳天に激しい衝撃を食らった。目の前で星が回る。

「あれっ？避けなかった（笑）」
はつきり目覚めたレイの横には少女がニヤリと笑いながら座っていた。

「……くっそお……いてえ」

リンの鉄拳は後頭部を直撃したらしい。いつもなら避けるのだが何故か避けられなかった。

「……レイ……着いたぞ……」

運転席に座る村仲が振り返りながらシートベルトを外していた。車の外は薄暗い。どこかの車庫のようだ。

「……ここに車を置いて置く……」

レイがふと燃料メーターを見るとほとんど0を指していた。

「さっさと降りろよ、レイ？ こちとら待ってるんだ。」

リンは既に車を降りていた。例もそれに続いて車を降りる。錆びた鉄のにおいが鼻をついた。

「ちょ……ひでえにおいだ、ここはなんだよあ？」

周りを見渡すと錆び付いた車の残骸が幾つも見える。

「……スクラップ置き場だ。ここなら誰も来ないから安心して駐車できる。……」

「ふん、なるほどねえ」

しげしげと辺りを見ながら呟く。頭上を見上げると屋根はあらかた崩れて骨組みになっていた。群青色の空が見透かせる。

……不意に何かが顔に当たった。

手を添えると水滴が付く。一滴ではなかった。パラパラと連続し

て落ちてきた。

「……雨か……」

「……ちくしょう、降ってきやがった！おいレイ、行くぞ？」
いまだに空を見上げるレイにリンは呼び掛けた。

「……………」

返答は無い。レイはただ空を見上げていた。

「おい？レイ！！」

「……！……ああ……」

我に戻ったようにレイは答えた。

「……お前大丈夫か？なんか変だぞ？」

車庫の入り口へと進むリンは気味が悪そうに言った。

「……ああ……なんか眠くてなあ……大丈夫だ……。」

頭をかきながらレイはリンの後に続く。

……
何でだ？あの空はあのときの……

不思議と頭にこびりつくあの色を振り払うようにレイは頭を振った。

「眠気かよ。心配して損したぜ。そら、仕事始めるぞ？」
車庫の入り口からは巨大な高層ビルが間近に見えた。

今回のターゲット“NEG”だ。

群青色の空にそびえる高層ビルは、重厚な威圧感を持っていた。

少年は先に行く少女と男性の後を追った。

【五】 It will be raining, but : < t .

はい どうだったでしょうか？

え？何でタイトルが「飯」だった？

いやぁ（´・・´）自分の小説は一話が長いんですが……

自分的には早く投稿したいwww

ということでしたらと長いパート3を分割して投稿してます（；
、）

分割した分を全て投稿したら一つにまとめるつもりです（、
、）

そんではまたよろしく～

感想その他いつでもつけつけてます～（笑）

【五】 It will be raining, but : < .

はい(・・)ブラックすwww

今回は貯めていた分の放出第二段です

今回はガラリと雰囲気が変わります(・・)

新キャラもでるんですよ(・^・^)/

【五】 It will be raining, but : < t .

溝ノ口地区、旧複合商業施設“NOCTY”のある一室……………

タバコの煙が漂うその部屋では、何人かの人間がテーブルを囲んでいた。

「それで、山中さん？わざわざ私を呼んで、どうしようと言うのです？」

薄暗い明かりの下でタバコを吸う男 すらりとスーツを着こんだ武器商人、中田が部屋の中で唯一の女性、山中智美に問いを投げ掛けた。

113

「あなたたちをここに呼んだのは、これの事についてよ」
そう言って山中は一枚のCD-ROMを取り出す。“K”に解析してもらったものだ。薄暗い光に反射して鈍く光った。

「勿体ぶらずに早く教えて貰いてえもんだ、我慢は苦手なんだな。顔に傷のある大柄な男が、山中を睨み付けていいはなつ。」

溝ノ口地区暴力団「鬼口会」首領、古林雄也だ。

溝ノ口のやくざの中では最大の勢力を持つ集団だ。

「フフ……短気は損気と言うヨ？古林サン。」

洒落たスーツを来た若いハンサムな男性がタバコを燻らせながら言った。狐のような切れ目がキラリと光る。

溝ノ口に蔓延るマフィア、「真義暗」の若頭、義徳助。名前からは中国系な雰囲気醸し出している。

「あんたみたいな口うるさい奴がいるからイライラするんだぜ？中華の兄ちゃんよ。」

「気のせいネ。むしろ、あなた居て皆さんむさ苦しくナイカ？」

「言っじゃねえか、中国野郎め……よっぽど血を見たいらしいな。」
二人の間には冷たい視線がぶつかり合っている。まるで火花が出ているようだ。

古林は甚平の懷をまさぐり、義はスーツのポケットに手を突っ込んでいた。

一触即発の状態だ。

……………ヒュッ

ズツガアアアン！！

先に動いたのは古林でも義でもなかった。

長い足がテーブルに振り下ろされ、見事に二つに折れ曲がった。
テーブルに置かれていた灰皿や吸殻、その他様々なものが宙を舞う。

「……………御闘争は他でやってくれないかな。俺は会合に来たつもりなんだけどねえ？」

部屋にいる最後の一人、情報屋、埼玉 司だ。

彼はしかめつらで腕を組ながら、無惨に粉碎されたテーブルの残骸に足を投げ出していた。

懷から黒光りする得物を取り出そうとしていた古林と義は、対峙した体勢そのまま埼玉の方を振り返った。

「……………ふざけんじゃねえ……………！ このガキがあ！！！」

真っ赤な顔をした古林はそのまま拳銃を抜き、埼玉に向けた。撃鉄を起こし、引き金に指をかける。

「……………若いくせによお、大人の話に口を出すんじゃ……………」

ガチャッ

「……………大人なら話を聞きましょうか？ まあ、蜂の巣になりたいなら構わないわ。」

立ち上がって銃を埼山に向けた古林の背中に何か冷たくて硬い物が押し付けられていた。いつの間にか背後には山中が立っていた。

「ッ！？」

押し付けられていた物が大型の拳銃だと分かると、古林は息をのんだ。

「この拳銃ねえ、グロック18っていうマシンピストルなのよ。要は機関拳銃、全弾33発だったわね」

そう言って山中はニヤツと笑った。（悪魔の微笑みだ）

「おやおや……………荒っぽいことはやめにしたいですねえ。仮にも私らはこの溝ノ口の実力者ですから。」

中田がタバコを指でつまみながら、皮肉ったように呟く。

「……………チツ、くそが……………」

古林は義の方を一にらみすると銃をしまって元の席についた。

「さてと……………話が中途半端になったわね、今日わざわざ溝ノ口を支配するあなたたちを呼んだのは重要なことについて話し合うためよ。」

山中も元の席に戻るとCD・ROMをしまい、分厚いファイルを取り出し、他の三人に見えるようにかざした。

「ただの厚い書類じゃねえか。何を話す必要がある？」

古林は偉そうに言った。先ほどの一件が気に入らないらしく、不機嫌だ。

「見た目はどうでも良いのよ、重要なのは中身。」

古林を睨み付けながら、山中はファイルを開いた。

「……………ッ!？」

その場にいた四人は凍りついた。

ファイルの中身のページ印刷されたロゴ……………赤と青の
ストライプに青地の空に浮かぶ白星、そして大きな鷲の紋章……………

……………

「……………アメリカ合衆国……………!」

「……………そう言うわけよ。だからこの会合を開いたわけ。」

山中はそう呟くとまだ記憶に新しい、あの激動の時代を思い出した。

“ U n i t e d S t a t e s ”

世界に類を見ない、経済力、軍事力、権力、すべてを掌握する超
大国。

世界の警察を自負し、第一次世界大戦、二次大戦、冷戦……………と
建国以来、全ての戦争に介入してきた国家。

この【ニホン】とよばれる無政府地帯が誕生したときも彼らはや
つて来た。

平和的治安維持と称する強制占領……………、理不尽な支配と武器を背
景とした不可避の暴力……………、彼らはそのために来た。

平和的なんかじゃない、ただの“チカラ”の濫用だ。彼らによって支配され、【ニホン】から放たれる情報は、造られた偽物……偽造し修正され、あたかも正常な日常が続いているように

そう、ひどい時代だった。だから我ら民衆は立ち上がった。いや立ち上がらなければならなかったのだ。

密集した都市部でも激しいゲリラ戦、建ち並ぶ建造物を木々に例えれば、これはベトナム戦争の再現だった。

かつて世界の経済の中心として名を馳せ、【ニホン】の首都として存在した“トウキョウ”は銃声絶えない混沌な空間となった。

誰もが銃を握り、海の向こうからやって来た偽りの平和の使者に抵抗したのだ。

長期的かつ大規模で先の見えない戦闘に発展したこの争いはアメリカの首脳にある決断をさせた。

最終兵器の使用

どんな兵器なのかは知らない、どんな破壊力なのかも知らない

ただその決断から数日後、

トウキョウは……………地図から消えた。

大量破壊兵器を使ったのか、はたまた別の方法なのかはわからない。

トウキョウの消滅……………それが事実だ。

「狂気に駆られた民衆からアメリカの若者を守り、【二ホン】の早期復帰を目指すため」

そんな声明が出たことも知らなかった。

これで抵抗が減ると思ったのかもしれない。

このトウキョウ消滅、後に“東京事変”と呼ばれるこの事件は、むしろアメリカの首を絞めることになった。

怒り狂い絶対排除を誓う民衆……

あまりの横暴さを危険視した世界各国の世論……

アメリカ国内でも政府に対する怒りが爆発した。正義は地に堕ちたのか、と。

様々な問題を引き起こした軍隊は最終的には去っていった。

彼らがもたらしたのは、破壊と無秩序だけだった。

民衆は自由を勝ち取り、今に至る。

しかし“東京事変”後相当な年が経っても、トウキョウは荒廃したままだ。

ここ溝ノ口からも以前トウキョウと呼ばれていた土地を見ることが出来る。

ただ何もない、瓦礫の土地

この土地こそが、我らにアメリカを連想させるのだ……

……

……

……

【五】

It will be raining, but :

<t :

どうでしたでしょうか（．．．）

アメリカの部分の物語設定は後付けですwww

実は最初からこの設定だったのですが、冒頭に入れ忘れており、ここにスライドイン（；、、）

新キャラについてはパート3が完結したときに改めてまとめて紹介します（、．．．）マジメ

ではまた次回をよろしく（、、、）〜？

【五】 It will be raining, but : < t .

狭く薄暗い部屋の中に重い空気が流れた。

誰かしらが持つタバコの煙が、無頓着に各人の合間に広がっていく。

この部屋にいるのは、みなあの時代 Peaceful age

……平穏時代の終焉 を経験したものばかりだ。

あの時代は激しすぎた、……………そう、何者も喪失から逃れられないほどに。

122

沈黙の時間は一瞬だが、今この部屋の中のそれぞれの心ではあの激動の全てが繰り返されていた。

「……………まあ、各人思うことはあるかもしれないけど会議を続けるわ。」

どんよりとした部屋に山中の声が響いた。

「今回見つかった情報は合衆国のもの……それは確かだわ。

でも中身はたいした内容ではない二ホンの気象情報やら雑貨の備品状況やら。

今のところ軍事的には何の動向もない。心配する必要はない……

……って言うのはあまっちょろい考えね。」

山中のずいぶんな溜めを含んだ言い回しに、聞いているものたちは顔をあげて眉を細めた。

「……なんだい？その言い方は、ああ？

そんなに気になることがあるっていうのかよ？」

湿気た煙草をくわえて、腕を組んだ小林は不服そうに吐き出した。

「ふん……貴方の単細胞なお脳じゃあわからないかもしれないわね

……

「おい……喧嘩売ってうるさいわねえ……

貴方にも解るよう簡単に言っただげるわ。

疑問はこつよ

何故こんなどうでもいいような情報をスーパーコンピュータを使って解読するような暗号に変換したのか……

しかさその情報を何故東柴社が運んでいたのか……

まあこついうことよ。

貴方も街を牛耳るくらいならこれくらい考えなさい。」

再び青筋をたてて口を開いた小林を制しながら山中は言い切った。

最後になつと笑いながら。

「ぐっ……………毎度毎度見下げたように言いやがって……………」

……………ずる賢い女狐野郎め」

「あら、それをいっなら貴方は野生のゴリラよ？」

それに“見下げたように”じゃないわ……………」

“見下げてる”の。」

互いに顔突き合わせながら言いあう。

お互いの利き腕が既にポケットの中の獲物を握っているのは明らかだ。

「ほらほら、口喧嘩なり殴り合いなりは会議が終わってからにしてくださいませんかねえ？」

我らが求めているのは汚い罵りと飛び交う銃弾ではなく、“情報”。

そう、「情報」なのですよ」

今まで傍観していた中田が煙草に火をつけ、薄ら笑いを浮かべながら口を挟んだ。

「……全く俺も同感だ。」

その金に汚い武器商人と意見が合うとは夢にも思わなかったけどね。

情報屋の俺としては金に勝るものが情報なもんで。」
相変わらず足を組みながら崎山も呟く。

「私にとっては情報」金なんですよ」

快活な笑いをあげながら中田がその後付け足す。

目は笑っていないかった。

「……ふふ。最もな理由ね。」

今ある情報は少ないわ。

それに対して過剰な反応するのも馬鹿らしいし、完全に無視するの

も危険……」

睨み付けていた小林から目を離し、ソファに深く腰掛けながら神妙な顔で山中は言った。

「………というコトは………必要なのは更なる情報、そうデスネ？」
足を組んで顎に手を添えながら、義は尋ねる。

「その為の会議よ。各人には情報網の拡大をお願いするわ。」

「………なるほどな。」

別に街に大きな影響力があるわけでもないのに、俺が呼ばれた訳が解ったよ。」

崎山が両手を首の後ろに回して伸びをする。

「そういうこと。」

この街は危うい均衡の上に成り立っている……

あの時代の終焉から興った街よ。

矛盾と混沌を基礎となし、暴力すらも糧として存在する……

この街を守る。

異物を排除し我らが“街”を維持する。

それが私達、力有る者の“raison d'être 存在意義”よ。

暴力と金を牛耳る私達のね。」

そついいながら山中は各人を見回す。

その目には鋭い光が煌めく。

「ふん 要は影でこそこそしてやがる、顔に覚えのない野郎共を見つけりゃ良いわけだろ？」

簡単な話だ。」

くわえていた煙草を摘まみながら、小林が答える。

「 単純明快

それが“力”さ。

正直あんたらの誰とも分かりあえるたあ、これっぽっちも考えてねえ。

だがな、“力”は唯一俺たちが同じように持つもんだ。

だから言わしてもらっぜ。

俺たち“鬼口会”は

極道の仁と義にかけて

この街に忠誠を誓う。

それだけだ。」

そう言っていると小林は、部屋の隅に置いてあったごみ箱に向けて湿気た煙草を放り、スツと立ち上がった。

「俺あ先に帰らしてもらうぜ。」

頭を使うのは俺たちヤクザの仕事じゃねえしな」

「新しい情報が入り次第、連絡するわ。」

貴方とは二度と会いたくないのだけどね」

体を翻し、ドアに向かうその背中に向けて山中は呼び掛けた。

「はあ、そうかい……そんな事あ俺だっと思うぜ、この女狐野郎。
じゃあな、他の方々。」

ドアを開けて最後の台詞を吐く。

ガッシャーン！！

小林は乱暴にドアを閉め、出ていった。

「……………さてと、

メンバーも欠けたことですし、これ以上ここで話し合うこともないでしょう……

自分も帰らせていただきますよ？

仕事を残してしましてね」

立ち上がった中田がスーツの折り目を正しながら言う。

「ワタシも帰らしていただくヨ、山中サン？」

それと同時に隣に座っていた義も立ち上がった。

「ええ、さっき言ったように情報の件は頼んだわ。

他については後日において連絡する。」

二人が出て行った後、部屋には山中と埼玉が残された。

「そう言えば、あんなところの他の連中はどうしたんだよ？」

埼玉がふつと気づいたように言った。

「私無しで仕事にいつてるはずよ。」

「…………ふーん。」

もしかしてガソリン関係か？」

「…………何で知ってる？」

山中が訝しげに鋭い目を椅子に座ってる青年に投げかけた。

「…………ああ、リンの奴が此方に来て情報を買ってったんでね。」

確かそんな感じの情報だったはずさ」

ズボンのポケットから使い古した手帳を開き確かめながら言っていた。

「……………成る程ね。」

で何でそんなこと聞くのよ？」

納得げに埼玉の返答を聞いた山中は、切り返し質問をする。

……………ちよつと考えるように間を置いて埼玉は呟いた。

「……………いや、なんとなくね

嫌な感じがして」

「ま、私も含めてB H Uは、いつでもトラブルに巻き込まれているようなものよ」

煙草を取り出して火をつけながら、自嘲気味に彼女は言う。

吐き出す煙は薄暗い室内の闇に消えていった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7271m/>

City of chaos

2011年2月24日15時32分発行